

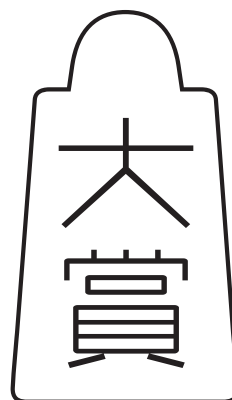
第9回 NITS大賞 事例集

令和8年3月

語り、描き、紡ぐ未来

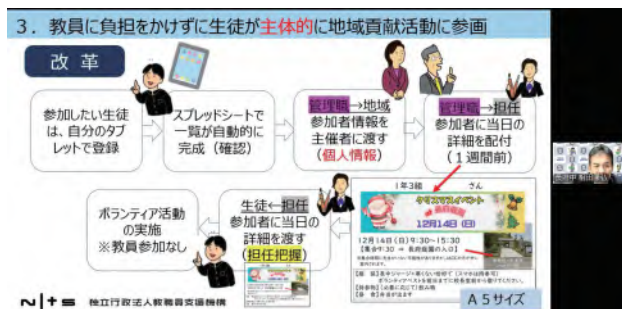


NITS
National Institute for
School Teachers
and Staff Development



第10回NITS大賞の
募集要項は裏表紙へ

令和7年度表彰事業(第9回 NITS大賞)実施概要



二次審査ではオンラインによる
プレゼンテーション審査を実施しました

目的

「NITS大賞」は、独立行政法人教職員支援機構(NITS・ニッツ)が、学校をとりまく課題の解決に向けてチーム学校で実践した取組を広く募集し、表彰・公開することにより、教育の現場に優れた取組を普及していく事業です。主題である「子供一人一人が輝ける場となるように～教師の働きがい再構築する学校づくり～」のもと、子供たちを主語にするために、学校関係者が主語となり、教職員、児童生徒、保護者、地域の方々などの多様な人々との協働を含め、のびのびと楽しく誇りをもって学校改善に取り組んだ教育実践を募集します。学校を挙げて課題に向き合い、改善していく様子を通して、学校関係者の思いや直向きさを広く伝えることで、全国の学校現場における更なる相乗効果を図ります。

募集要項

エントリー要件 学習指導要領の着実な実施、学校における業務改善への取組、特色ある学校づくりなど、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現に向けて、多様な人々との協働を含め、のびのびと楽しく誇りをもって学校改善に取り組んだ実践活動を実施していること。また、その実践が教職員等の学びや成長につながり、学校全体や地域の教育力向上に寄与していること。
※令和7年度または同年度を含む期間に取り組んだ実践活動を対象とします。

エントリー資格 「エントリー要件」に示す実践活動に主体的に参画した個人または団体(教職員、児童生徒、保護者、地域の方(学校運営協議会を含む)、及びその関係団体)
※個人がエントリーする場合、または学校以外の団体等がエントリーする場合は、必ず当該学校長の許可を得てください。

審査の観点(3観点)

1. 学校や児童生徒の現状を踏まえ挑戦と工夫を重ねた実践が学校全体に変化をもたらし、教職員等や児童生徒にポジティブな影響を与えている。
2. 取組の方法や工夫だけでなく、そこで生じた困難や試行錯誤の過程が広く共有され、同様の課題を抱えた教職員等の学びにつながる。
3. 取組の過程の中で、周りと教職員等が協働を通して学び合い、試行錯誤を繰り返しながら改善に向かっている。
※取組の事実や結果だけでなく、その過程の中で、下記の点について、特に評価のポイントとして判断します。
 - ・教職員等にどのような学びや成長があったのか
 - ・困難をどのように乗り越えたのか
 - ・どのように周りと協働していったのか
 - ・なぜそのような結果が得られたのか
 - ・それを可能にしたリソースをどのように確保したのか

応募数 103点

一次審査 エントリーシートによる書類審査

二次審査 プレゼンテーション審査

大賞1点、準大賞2点、優秀賞5点、入選2点を選出

審査委員長 国士館大学 教授 北神正行

今回受賞された各校の取組は、学校現場が直面する多様な課題に真正面から向き合い、従来の枠組みにとられない柔軟な発想と創意工夫により、新たな教育の可能性を着実に切り拓いている点に大きな価値があります。児童生徒、教職員、保護者、地域がそれぞれの立場を生かしながら協働し、持続可能で無理のない形で学びの充実を図っている姿は、これからの学校づくりに重要な示唆を与えるものでありました。こうした実践が広く共有されることで、全国の教育現場に新たな視座と展望をもたらし、日本の教育のさらなる充実と発展につながることを心より期待しております。



認定NPO法人カタリバ 代表理事 今村久美

各校のプレゼンテーションからは、日々の教育実践に真摯に向き合い、現場の課題を起点として新たな学びの在り方を模索する姿勢が強く伝わってきました。AI社会の進展の中で、学校の果たすべき役割や意義が改めて問われる今日、学校のみで完結するのではなく、地域社会との連携のもとで生徒の主体性や意欲を育もうとする取組が特に印象的でした。DXの活用を一つの手段としながら、地域の力と結び付けて学びを広げていく実践は、これからの学校の方向性を示すものです。これらの実践が広く共有され、全国の教育現場に良い影響を与えていくことを期待しております。



千葉大学 教授 貞広斎子

学校教育の持つ力と可能性を改めて強く感じました。多様な子供たちと教育現場を前提とする学校においては、教育の質を最終的に支えるのは現場の創意と実践であると考えております。目の前の子供一人一人に真摯に向き合い、その状況に応じた手立てを講じる営みは、まさに現場にしか担えない重要な役割です。今回の取組には、地域や関係者と力を合わせながら新たな実践に挑戦する姿勢が随所に見られました。今回の受賞校の取組みはどれも素晴らしく、審査員として多くの学びを得ました。本年度も審査を通じ、私自身が元気をいただきました。ありがとうございました。



日本放送協会静岡放送局 局長 二宮徹

日本の教育現場の確かな歩みと、実践を絶えず積み重ねてこられた皆様の努力と工夫に深い敬意を抱いております。主体的な学びの実現と地域との向き合い方を、各校が創意工夫をもって具体的な実践へと結び付けている点が印象的でした。受賞された学校の取組には、地域の特色や資源を生かしながら課題を先取りし、持続可能な教育活動を築こうとする姿勢が見られました。多様な関係者と連携しながら教育の可能性を広げていく実践は、多くの学校にとって大きな示唆を与えるものです。今後、この実践が広がり、日本の教育の発展につながることを期待しています。



芸術文化観光専門職大学 学長 平田オリザ

本年度受賞された取組には、それぞれの学校が地域の特色や教育課題を的確に捉え、創意工夫を重ねながら持続可能な教育活動を築いている姿が見られました。とりわけ、画一的な取組にとどまらず、子供や教職員が主体的に関わりながら、それぞれの関心や強みを生かせる仕組みを丁寧に構築している点が大きな特色であったと感じております。また、地域の文化や資源を教育活動に生かす工夫や、学校と地域社会が連携しながら学びを広げていく姿勢も随所にうかがえました。こうした取組の積み重ねが、これからの学校教育の新たな未来を切り拓いていくものと感じております。



総合地球環境学研究所 所長 山極壽一

本年度の発表はどれも大変優れたものであり、各校がそれぞれの特色を生かしながら個性豊かな教育実践を積み重ねていることが強く伝わってきました。学校教育が大きな転換期を迎える今日、多様な文化や価値観が交わる社会の中で、子供たち一人一人の主体性や個性をいかに伸ばしていくかが重要な課題となっています。今回の取組には、地域の文化や資源を教育活動に生かしながら、子供たちが実体験を通して社会や人との関わりを学ぶ工夫が随所に見られました。こうした実践が、これからの学校教育の新たな可能性を示していると感じました。皆様のさらなる挑戦と発展を期待しております。

教職員支援機構理事長より

独立行政法人教職員支援機構 理事長 荒瀬克己

NITS大賞は、学校・園の実践を発信していただくことにより、学校関係者が互いに励まし合えることを願って実施しています。子ども一人ひとりの学びの充実をめざす際、子どものためにと考えるのはとても重要ですが、その際に見落としてはならぬものがあると感じています。教育への愛情や責任感、使命感が大切なのは言うまでもありませんが、義務感が強くなり過ぎるとどうかということです。教職員自身が楽しい、面白いと思える取組のほうが、子どもの豊かな学びに繋がるものになるのではないかと考えます。受賞校の実践から、教職員の生き生きとした学びを読みとっていただければ幸いです。





長府の街は君なしじゃはじまらない ～生徒の主体性と郷土愛を育む仕組みづくり～

下関市立長府中学校

活動概要

学校のある城下町長府は、歴史や文化、活気ある商店街など“生きた教材”に恵まれている。一方、生徒の自己肯定感や地域貢献意識の低さが大きな課題であった。そこで、自らの意思で地域に出て活躍する生徒を育てるため、地域の活動やイベントの主催者の思いを直接聞ける体制を整え、さらにICTを活用して教員の負担軽減も実現した。

アピールポイント

ICTの活用により、教員も生徒も地域住民と顔の見える関係を築ける仕組みを構築した点が強みである。また、教員の負担軽減に加え、地域貢献活動証明書の授与によって校外活動の振り返りが可能となり、教育的なPDCAサイクルを回す仕組みとなっている。

評価点

地域活動に生徒が主体的に参画できる仕組みを構築し、郷土愛と主体性の育成を目指した取組である。地域団体の思いや活動の目的を動画で生徒に直接届け、強制ではなく希望する生徒が手を挙げて参加する形とした点が特徴的である。地域活動では教員が生徒を動員する形になりがちなか中、意識改革から取組を進め、生徒の意欲と主体的な参加を引き出している。参加後の振り返りも行い、学びを次につなげている点も意義深い。



令和7年度表彰事業（第9回NITS大賞）

準大賞



バラでみんなとつながろう！ ～地域リソースを活用した共働的な学びの実践～

広島県立福山特別支援学校 平松紀恵、三堀正貴、池田ひとみ

活動概要

肢体不自由のある児童生徒の重度・重複化が進む中、より魅力ある教育内容を想像するために学校運営協議員の力を借りて地域との繋がりを構築した。福山市の花「バラ」は、戦後復興の象徴として市内に100万本あるとされており、色や香りもはっきりしているため障害を有する児童生徒にも分かりやすく、題材として扱うことで多様な学びを提供できた。



アピールポイント

教職員も保護者も関係者も目指すべきゴールは子ども達の健やかな成長！
何をどのようにするのかを分かりやすく、多くの人を巻き込み、それぞれが力を発揮することで学校理解促進に成功した。今では協力者が増え、学校が大きく変容し、取組は発展中である。

評価点

地域の象徴である「バラ」を軸に、地域と連携しながら教育課程の充実を図った取組が印象的である。肢体不自由や医療的ケアを必要とする児童生徒が多い中、学びが学校内に閉じがちという課題に向き合い、バラ園づくりや作品制作、地域行事への参加などを通して地域社会とのつながりを広げている。コロナ禍で弱まった地域との関係を再生しつつ、カリキュラム・マネジメントの視点から教科横断的な学びや交流を生み出している点が意義深い。地域の人々との関わりを通じた学びのさらなる発展が期待される。

変わる先生、学校、そして子ども ～アップデート 主体性×対話×DX改革～

海南市立亀川小学校

活動概要

授業改善・校内研修の刷新・校務DXを軸に、個別最適化学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、学習者中心の学びを進めた取組である。自由進度学習や行事での選択制等を通して、主体的に学ぶ姿の育成を学校全体で図る。校内研修「授業改善プロジェクト」では、教員の授業観を再構築した。



アピールポイント

校務DXによる業務改善が「余白」を生み、教員の主体的な研究姿勢と職員間の対話力が高まり、学校全体の“観”を転換した点が強みである。実践は授業の枠を超え、運動会の改革へ。子どもが自ら選択し、自己決定する姿が授業でも学校行事でも見られた。

評価点

授業改善と校務DXを一体的に進め、「子どもが主語」の学びの実現を目指した組織的な取組が評価できる。DXの活用によって校務の効率化と情報共有を進め、教員に時間的な余白を生み出すことで、子どもの主体性を引き出す授業づくりに挑戦している。単元内自由進度学習やマイプラン学習、子ども主体の行事などを通して、主体性と対話を大切にしたい学びへと転換している点も特徴的である。DX活用の課題と効果を検証しながら授業改善を進め、学力向上にもつながっている実践として、他校の参考となる取組といえる。

令和7年度表彰事業（第9回NITS大賞） 優秀賞

松山発！ 巻き込み型改革！ ～「ヒガシンカタイム」で始まる「観」の転換～

松山市立東中学校

活動概要

「個別最適な学び」と「協働的な学び」のベストミックスを目指し、全校版自己調整学習「ヒガシンカタイム」に挑戦した。生徒を主語にする学校教育を実現するため、試行錯誤を重ねながら実践を展開。生徒が目標を立て、学び方を選び、振り返る学習サイクルに全校で取り組み、生徒が主体的に学び続ける学校づくりを進めている。

アピールポイント

「こんなことできないかな」というひらめきから始まったこの取組は、教職員や研修センターを巻き込みながら進化した。生徒が多様なスタイルで楽しく学ぶ姿は、保護者や地域の「観」をも変え、生徒を中心とした前向きな変化の渦を学校内外に巻き起こしている。

評価点

生徒に学びを委ねる「ヒガシンカタイム」を軸に、生徒の自主性を高める新たな学びの形を創り出した取組が際立っている。月2回の自己調整学習を通して、生徒が学び方や学習内容を自ら選択する機会を設け、自由な学びを実現している点が特徴的である。導入に際してはマニュアル化や体制整備により教員の不安に配慮しながら実践を進め、現場の声を生かして改善を重ねている。主体的に学び合う学校文化の形成につながる取組として、今後の広がりが期待される。



ゼミから繋がり、広がる STEAM ～全教科でつむぐ学際的探究学習デザイン～

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

活動概要

本校では、総合的な探究の時間に、教科連携型の探究学習(STEAM)として、少人数ゼミ形式・異学年合同の個人研究を行っている。生徒240名がSTEAM担当16人のどの教師とも関わりつつ、生徒を他の生徒、教師、文献、資料など、研究に役立ちそうなリソースに繋げるマネジメントを教師が担うことを徹底し、無理に内容の指導はしないことを基本としている。

アピールポイント

「教師の専門性は一旦横に置く」ことで、「クラスマネジメント(担任)」の力が生きる仕組みとなった。これにより生徒の学際的な探究は活発になり、多様な視点でアプローチができている。多くのコンペティションにも意欲的に応募し受賞する生徒が増えた。

評価点

大学附属校の強みを生かし、研究と実践を往還させながら総合的な探究の時間の充実を図った実践に特色が見られる。教員が教科の枠を越えて連携し、研究者や大学生も含めたチームで生徒の学びを支える体制を整えることで、専門性を「教える」から「つなぐ」学びへと転換している点が特徴的である。探究に伴う教員側の課題を視点の転換によって乗り越え、ゼミ形式の学びを発展させている点は、探究活動の質を高める実践として意義深い。



“やってみたい”が生まれる学校 ～生徒も先生も主役となる探究文化の醸成～

愛媛県立丹原高等学校

活動概要

丹原高校の特色を活かし、学びや資源を共有することで生徒と教職員が共に成長できる学校を目指した。①独自性の高い「総合的な探究の時間」の構築、②生徒や教職員の「やってみたい(=探究)」に光を当て探究文化を醸成、③学校で生まれる取組を「私たちの取組」として共有し、共創を生む環境を整備。探究を日常とする学校づくりに挑戦した。



アピールポイント

「やってみたい」を合言葉に、生徒・教職員・地域の声を束ねる仕組みを構築し、探究文化を醸成。「どこにでもある学校」だからこそ、「やってみたい」が生まれ続ける「ここにしかない学校」づくりに挑戦した点。多くの挑戦を生み出す学校文化へと発展させた。

評価点

地域や社会と接続した探究活動を通して、生徒の主体的な学びを育てようとする取組が印象に残る。総合的な探究の時間を構想・具現化する過程で、学校の有する資源や地域の人材を生かした仕組みづくりを進め、新たな学校文化の創造につなげている点が特徴的である。生徒だけでなく教員も「やってみたい」という意欲を大切にしながら探究を進めている姿勢も印象的である。閉校を前にしながらも挑戦を続ける取組は、高校における探究活動のモデルとなる実践として参考になる。

アウトプットで変わる学び ～タブレットで創る教員と生徒の主体性～

いちき串木野市立羽島中学校

活動概要

閉校を目前に控え、GIGAスクールの先にある「学びの質的転換」に挑んだ。「アウトプット」を核に、生徒が主役の授業スタイル「アウトプットラーニング」、教員自らが探究する「個人テーマ研修」、DXによる「余白」創出の三位一体改革を推進。教員と生徒が共に試行錯誤し、表現し合う「学びのコミュニティ」へと学校文化を劇的に変容させた。



アピールポイント

学習で得た知識技能を活用したアウトプットの授業が、生徒の主体性を引き出した。教員も「学び手」として試行錯誤を共有する文化が定着し、生徒会DXや地域へのSNS発信も活性化した。閉校を目前に控えながらも、ICTを武器に最後まで学びを止めない挑戦の姿勢が最大の特徴である。

評価点

生徒の学びの質の転換を「アウトプット不足」という課題から捉え、授業・研修・学校文化を一体的に改革した点が評価される。タブレット端末を思考や表現の道具として活用し、アウトプットラーニングや探究活動を通して生徒が考えを発信し合う学びを実現している点が特徴的である。教員も個人テーマ研修などを通して探究的に学び続ける姿勢を育み、学校全体に学び合う文化が広がっている。ICT活用と学びの質の向上を結び付けた実践として、成果と課題の共有が今後の学校づくりの参考となる。

全校・地域でつくりあげる特別活動 ～自分事になる栗中版学級会指導モデルの確立～

栗東市立栗東中学校

活動概要

生徒指導課題の根底にある「対話の力」の不足を解決するため、研究対象を特別活動へ転換。全校共通の「栗東中形式」学級会を軸に、独自のツールを用いたスキルの系統的指導を確立した。生徒が主体的に課題解決に向き合う態度の育成と共に、教員がその変容と共に語り合う学校文化を醸成。現在は、校区の義務教育9年間を見通した計画策定へと繋げている。



アピールポイント

「栗東中形式」学級会の確立である。話し合いエクササイズや司会生徒による予想板書、自己評価で対話スキルを可視化し、中学校における系統的な指導体系を構築した。生徒の主体的な課題解決と教員の協働体制を両立。小学校と連携し、義務教育9年間の学びの連続性を追求している。

評価点

特別活動を核とした校内研究へと転換し、生徒の主体性や協働的な課題解決力の育成を目指した実践が際立っている。学級会指導において「栗東中形式」の共通モデルを確立し、話し合いエクササイズや予想板書などの工夫により、生徒の話し方や合意形成力を体系的に育成している。研究の過程で生じた課題や成果を教職員で共有しながら改善を重ねている点も特徴的である。さらに小学校段階の学びも参考にし、小中9年間を見通した取組へ発展させている点は、学校全体で主体的な学びを支える実践として参考になる。

令和7年度表彰事業（第9回NITS大賞） 入選

合戦の場は「守り」から「攻め」へ ～「つくる」校内研修で学校力を高める～

栃木市立合戦場小学校

活動概要

「子どもの学びと教師の学びは相似形である」という視点に立ち、個性を生かした自律的・協働的な校内研修で学校力向上を目指した。具体的には、役割分担の明確化、研修の多様化と効率アップ、個別最適な関わりに取り組んだ。土台作りの1年目、モデリングの2年目を経て、「受ける」から「つくる」校内研修を実現することができた。



アピールポイント

研修の目的が「指導力向上の場」「知識習得」だけでなく、対話を通して「多様な見方・考え方に気付く場」「同僚性を高める場」へとバージョンアップした。企画・運営に主体的に取り組む場を設定することで、教師のやりがいにもつながった。

評価点

校内研修の形骸化という課題に向き合い、「受ける研修」から「つくる研修」へと転換した取組に大きな価値が見いだされる。現状分析に基づき方針を明確にした上で、教職員一人一人が企画や運営に関わる仕組みを整え、対話や協働を通した学びを広げている点が特徴的である。教務主任として3年間にわたり段階的に改革を進め、中堅教員も巻き込みながら校内研修の文化を育ててきた過程も示唆に富む。教職員が学び合う楽しさを共有しながら学校全体の授業改善につなげている実践といえる。

学ぶ喜びを感じ挑戦する力を育てる ～じぶん未来ラボ×キャリアデザインステップ～

尼崎市立小田北中学校

活動概要

教員の価値観のズレと生徒のつまづきを起点に、全校で対話し授業展開を共通化した取組である。互観で実践を言語化し横展開し、アンケートで変化を可視化した。ケアで取りこぼしを減らし、外部の知見（大学・地域人材等）を授業改善の対話に接続し、子どもの学びを中心に共同設計を進めた。挑戦できる安心を土台に、教科の学びを探究へつないだ。



アピールポイント

相反する意見を持ち寄り、対極する意見を丁寧に対話でつなぎ、ケアが必要な生徒の学びも発足し、生徒の挑戦を支える協働体制を築いた点である。互観と記録で工夫を循環させ、取りこぼしを減らしつつ、大学・地域人材と共同設計を重ね、授業改善を磨いた。

評価点

学校課題を踏まえ、「探究」を軸に総合的な学習の時間のプログラムを再構築した取組が印象的である。「じぶん未来ラボ」などの活動を通して、生徒が自ら課題を考え行動する機会を広げている点が特徴的である。教職員も前向きに関わりながら試行錯誤を重ね、職場体験や探究活動を組み合わせて学びを発展させている。学校課題に応じた学びの仕組みづくりに挑戦している点が印象に残る。

各賞の発表

第9回NITS大賞は、学校現場等から103点の応募がありました。
今年度は大賞1点、準大賞2点、優秀5点、入選2点が選出されました。
※以下、掲載順は賞ごとにエントリー番号順となっています。

奄美群島高校探究コンソーシアム

オール奄美で取り組む人財育成 ～南北200km奄美の高大連携及び高校間交流～

活動概要

大学のない奄美群島の高校では、高大連携や高校間交流が他地域よりも困難であるという課題があった。そこで、群島内の全高校と大学等が参画する「コンソーシアム」を設立。支援可能な研究者の情報を、高校間で共有する仕組みを整備した。また、コンソーシアム主催で群島内の課題研究発表会を開催。群島内の高校生達が交流する機会を創出した。



本コンソーシアムの取組については、大学との連携が難しい離島という環境下で、奄美ならではの「関係人口」に着目し、生徒の探究活動を支える新たな仕組みを築いた点を、高く評価していただきました。

受賞を契機に、大学や研究者とのネットワークがさらに広がり、連携体制も一層強化されました。また、受賞後に開催した「高校生サミット IN 奄美 2025」(令和7年3月)では、各校の研究発表について、大学教授から「前年を大きく上回る内容」と高く評価されるなど、群島内の高校生たちの探究活動の質や意欲は着実に向上しつつあります。

この度の「大賞」受賞のニュースは、メディアでも広く取り上げられ、地域の皆さまから喜びの声が多数寄せられました。また、県内外の教育関係者からも取組に関する問い合わせがあり、奄美の教育への関心が高まっていると感じます。さらに、奄美群島出身のOB・OGからは、「故郷の教育が評価され、誇りに思う」とのメッセージも届きました。

令和7年度からは、奄美群島全12市町村で構成される奄美群島広域事務組合による助成が始まり、活動の安定性と持続可能性が大きく向上しました。この取組を通じて、群島内の高校や自治体、そして研究者が手を携え、人財育成と地域振興を共に考える土台が確実に築かれたと思います。現在、本コンソーシアムは奄美群島を繋げる新たなプラットフォームの一つとして、その役割を担い始めています。

今後も、奄美だからこそ実現できる教育のかたちを追求し、離島の高校生たちが未来を切り拓く「人財」として育つ環境づくりに全力で取り組んでいきたいと思っています。

横浜市立旭小学校 玉置哲也

校内研究を「なぜ」から問い直す ～大人も子供も一人ひとりを大切にする学び～

活動概要

長年に渡り、多くの学校で取り組まれてきている「校内研究」。本校では授業改善に大きな役割を果たしてきた一方、負担感が強い傾向もあり、形骸化してきている側面もあった。そのため、一度「なぜ、校内研究を行うのか」ということから見直し、教職員一人ひとりのキャリアに応じた成長に寄与する校内研究を目指し、在り方や取組を改善した。



授業研究の大切さや価値を感じる教員がこれまで以上に増えてきています。年度末の反省では、「年間一人1回の授業公開ではなく、2回行い、振り返りをした方がよい」という意見も出てきました。一方、「急に増えると…」という声も、もちろんあるので、今年度は研究授業として授業公開をする回数は、選択制になりました。授業を担当する職員全員が1回は授業公開を行い、2回目は授業公開以外にもレポート作成等、インプットしたことを様々な方法でアウトプットします。結果的に約8割の教職員が一人2回授業公開を行います。回数が増えることに価値がある

のではなく、同僚や他者に授業を觀てもらうことに価値を感じている人が増えていることが嬉しいと感じています。

そして、この校内研修の在り方が、横浜市各校に設置されているメンターチーム(若手教員を中心としたメンバーで学ぶチーム)の活動内容も、所属する教職員一人ひとりの思いや願いを大切にするを中心にインプットする活動内容へと変わり始めています。

また、今回の受賞を機に、横浜市教育委員会の授業改善支援センターから本校の校内研究の在り方を発信し、参加者が自校の校内研究の在り方を問い直す研修を実施していただいたり、他都市の教育委員会から研究主任向けの研修に招いていただいたりしています。

校内研究を核としながら、授業について考えることは大切なことであるという風土が根付き始めていると感じています。

大 賞

【活動名】 長府の街は君なしじゃはじまらない ～生徒の主体性と郷土愛を育む仕組みづくり～

解決すべき課題：「将来、地域や社会のために貢献したい」と考える生徒の割合が少ない

本校生徒は、学校生活に誠実に向き合い、学力調査の結果も安定している。一方で、受け身の生徒が多く、自ら課題を発見し行動する力の育成が課題となっている。この傾向は「自己肯定感」の低さに表れており、「将来、地域や社会のために貢献したい」と考える生徒の割合も少ない。

学校周辺には、幕末の歴史を今に伝える観光スポットや博物館が点在し、地域の商店街も活気に満ちている。地域住民や保護者は世代を超えて熱心に活動しており、まさに“生きた教材”とも言える環境が広がっている。学校は、こうした大人の想いに触れさせながら、生徒と地域をつなぎ、地域貢献の意識と行動力、地域への愛着を育む場であるべきである。

しかし、学習指導や生徒指導、不登校生徒への対応、部活動指導など、教員の業務は多岐にわたり、地域との連携・協働に十分な時間と余裕を確保することが難しいのが現状である。

目標：地域貢献活動に自ら手を挙げ、長府のまちで主体的に活動する生徒を200人以上育てる

本校では、学校教育目標（＝OUTCOME）を

『三気の教えと郷土愛を誇りとし、夢の実現に向けて主体的に活動できる生徒の育成』とし、全ての教育活動がこの学校教育目標達成に向かうべく、教育課程を編成し、コミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校運営を行っている。特に、目標にある「郷土愛」と「主体的に」の部分は、学校の枠組を超えた地域との連携・協働による取組が大きなカギを握っている。

方針：教員に負担をかけずに生徒が主体的に地域活動に参画する持続可能な仕組みを作る

1. 1年間の地域貢献活動を年度当初に見える化し、自分にできそうなことをイメージさせる
2. 活動やイベントの目的を主催者から直接、生徒たちに語ってもらう（それを教員も聞く）
3. ICT技術を用い、参加生徒の管理や学校と地域のつながりを簡略化する（担任の負担減）
4. 小中高校生を交えた「熟議」を実施し、生徒・教員・地域住民が互いの想いを共有する
5. 教職員は、教育課程外の活動（特に土・日）に直接関わる必要はない。その代わり、日々の関わりの中で生徒の内面に働きかけ、地域活動への意欲や主体性を育むことに専念する

活動内容①：教員の負担なしに生徒が地域とつながり、地域貢献活動に参加する仕組みの構築

学級担任や部活顧問に依頼することなく、生徒が自ら手を挙げて活動に参加できる仕組み。

目的 手段	顔見知りの関係をつくる工夫	ICT技術の活用	地域で経験・体験を積み、地域貢献活動の良さを実感	自己肯定感アップを狙う
流れ	 地域ビデオの上映	 参加申込	 地域貢献活動の実施	 活動証明書の授与
学校	撮影は地域担当	Google Form	ボランティアベストの貸出	校長室で授与式
業務改善	（学級担任）給食時にビデオを流す	一覧がスプレッドシートに	名簿一覧を地域代表に渡す→ボランティア保険に加入	地域団体が作成→自己推薦入試に

活動内容②：地域や子どもたちと膝を突き合わせて話をする機会を作る

教員の負担軽減は必要なことではあるが、関係者と「目標やビジョンを共有する」ことは決しておろそかにしてはならない。そこで本校では、毎年「熟議」を実施し、全教員を参加させている。生徒の内面に働きかけるには、教員もその舞台となる地域住民の想いに直接触れる必要がある。



取組の過程：ポイントは、人々の「意識改革」と「取組や活動の実践」を段階的に進めること
目標達成に向けた取組を進めるにあたり、最も難しいのは、人々の「意識改革」である。そこで、以下のような段階を踏みながら、「意識改革」と「取組・活動」を同時に進めてきた。

段階	地域住民・団体・PTA	教職員	生徒
第1段階 →理論上の意識改革	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャルな世界で生きていく生徒たちに、リアルな体験をさせましょう ・「ボランティア」ではなく、地域貢献活動という位置づけをお願いしたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての教育活動は、学校教育目標の達成に向けて行われるもの ・地域や社会に目を向けた教育活動を展開する方針を理解させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・年に1回は「長府のまちで活躍しよう」の方針、ボランティアではなく「地域づくりへの参画」の意識を全校生徒に浸透させる
第2段階 →実行による意識改革	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちに、直接「想いや活動の目的」を伝えてほしいことを地域に依頼し、ビデオを撮影（5月～11月は8本） 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食時間に教室で地域ビデオを上映・視聴 ・小中高熟議への全員参加により、地域住民と目標・ビジョンを共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味のある取組・活動に自ら申し込む ・部活動・塾・遊び等の時間を生徒が自分自信で調整する
第3段階 →他者との関わりによる意識の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に足を運ぶ回数が増加。それに伴う生徒と関わる頻度の増加 ・学校の現状や生徒の様子を正しくご理解いただく 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年・分掌に関係なく、地域住民・保護者の想いを知る機会の増加 ・勤務に関係なく、生徒の活動の様子を見に行く 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方と顔見知りの関係になることによる安心感の向上 ・学校内外での気持ちのよいあいさつ
第4段階 →持続可能な取組へ	<ul style="list-style-type: none"> ・PTAや学校運営協議会での協議、地域学校協働活動推進員との連絡・調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の主体性を伸ばすための声かけの増加 ・教員の主体的な関わり 	<ul style="list-style-type: none"> ・未経験者や友だちを誘う経験者の増加 ・地域課題への関心

その他、生徒・教員の意識を高めるための広報として、「地域貢献活動参加者の名簿を掲示」「活動の見える化のために写真の掲示」・「HP・学校だよりによる紹介」・「経験者が未経験者に語る会の設定」などを行うとともに、教員が生徒に感想を聞いたりすることで、自己肯定感、自己有用感の向上に結び付けるようにしている。

活動の成果：

① 主体的に地域の活動に参画する生徒数の増加

4～11月（予定）までの地域活動に自ら手を挙げて参加した生徒数は、全校生徒418名中107名（25％）にのぼる。部活動や地域クラブ、習いごと、塾、受験勉強など、日々忙しい生活を送る中で、この参加率の増加には学校側も驚きを隠せない。

土曜夜市	ペンキ塗り	月見イベント	防災訓練	光の祭典	海響マラソン	・・・
23名	7名	4名	15名	46名	76名	・・・

11月以降も中学生が参画する活動やイベントがあり、多くの参加希望者が出ている。3年生は受験シーズンのため無理はさせないが、年間で全校生徒の約半数が自ら手を挙げて地域貢献活動に参加する目標に近づけている。生徒たちの「主体性」の育成は、着実に進んでいる。

② 教職員の負担軽減

昨年度までは、地域から活動実施直前の依頼が多く、参加生徒を募るのに大変苦労した。参加希望が出なかったら、部活単位で参加をお願いするなど、顧問も土日に勤務外の時間がとられることがあった。しかし、この度の仕組みづくりの成果もあり、学級担任は日頃の生徒との対話の中で、自然に「地域や社会貢献」の話題ができるようになった。興味をもつ生徒の“背中を押す”ことや、未経験者の“心に火を付けること”に専念できるようになったことは大きい。また、活動やイベントに興味をもった教員が、無理なく自主的に生徒の活動の様子を見に行くなど、教職員の負担感の軽減につながっている。

【エントリー名】 広島県立福山特別支援学校 平松紀恵、三堀正貴、池田ひとみ

準大賞

【活動名】 バラでみんなとつながろう！
～地域リソースを活用した共働的な学びの実践～

解決すべき課題：児童生徒が地域・社会とつながりをもつためにはどうすれば・・・



本校は、肢体不自由教育を担う特別支援学校である。**重度重複障害**（身体障害と知的障害を併せ有する。）を呈する児童生徒が多く在籍しており、児童生徒の身体、認知など発達段階に応じた配慮や工夫をしながら、教育活動を遂行している。学習指導要領で「**社会に開かれた教育課程**」の実現が求められているが、身体を自由に動かすことや自ら表出することが困難な児童生徒達において、「**学校内**」もしくは「**家庭**」といった内部環境での教育活動に制限されるため、実現が難しい状況である。現在でも、校外を意識した教育活動として児童生徒の作品をホームページに掲載したり、近隣にある唯一の商業施設に展示したりと、**地域・社会とのつながりを意識した教育活動を行っているが、児童生徒が直接的に地域の人と関わる機会が未だ少ない。**

目標・方針：地元、福山市が掲げるローズマインドを教育課程に・・・

本校の所在地、福山市の花であるバラを題材にした学習を通して、地元への興味関心を高め、郷土愛を育てることや福山市のまちづくりの取組から、平和について考えたり、市民の思いを知ったりして、福山市が掲げるローズマインド（思いやり、優しさ、助け合いの心）を本校児童生徒に育むことを目的とした。教務部を中心に、教育課程の大変革を進め、福山市役所などの関係各所と連携し、令和7年度5月に開催の第20回世界バラ会議福山大会に参加し、地域・社会とのつながりを意識した教育活動の実現を目指すこととなった。

活動内容：課題を乗り越え、校内全員の気持ちを一つに・・・

① バラ園づくり

福山市は「100万本のばらのまち」と呼ばれており、戦後復興から現在まで市民がたくさんのバラを育てている。本校に訪れる方々が目につきやすい場所である玄関前にバラ園を作ることとした。本校の生徒は、今までバラを育成した経験がなく、ノウハウもなかったが、バラの育成に詳しい地域の方の助力を受けて、晴れて大規模なバラ園を完成させることができた。



生徒デザインバラ花壇

② 給食でバラを使ったデザートの開発

地元の企業が商品化している食用バラのジュースを使用したデザートを栄養教諭が考案し、給食でパンナコッタを提供してもらった。その企業からバラジュースについての学習用の動画を提供して下さることとなり、食育が深まった。また、国語科の授業でお礼状の作成をすることで、教科横断的な指導にもなり、目標を大きく上回る結果となった。



バラジュースを使った
パンナコッタ

③ 第20回世界バラ会議福山大会への参加

【美術科でバラをモチーフにした「しおり」づくり】

本校生徒がデザインした「しおり」を世界バラ会議福山大会の参加者に配布した。生徒は福山市の景勝地「鞆の浦」の常夜灯を調べ、バラの絵と共にデザインした。全校生徒及び保護者教職員の投票にて2案を選定、800枚を作成配布することができた。

【世界バラ会議開会式参加】

世界バラ会議福山大会の開会式に市内の小学生と特別支援学校の児童生徒が招待され、児童生徒会から2名が出席した。参加者と直接交流をしながら、本校作成のしおりを実際に手にした参加者を確認することができ、貴重な経験となった。

【世界各国のバラ関係者向日ツアーに参加】

約1週間続く世界バラ会議福山大会は、参加者がバラに関係する箇所を巡る日ツアーが催される。本校の近隣施設の福山サービスエリア上り線のバラ花壇にも参加者が立ち寄るため、行政や運営協議員と連携し、本校のブースを設けて本校紹介動画の上映やしおりやチラシの配付、参加型アート等で参加者と児童生徒が直接交流することができた。



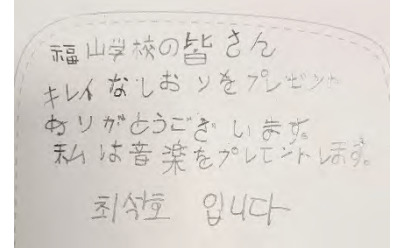
開会式に出席する様子



本校が作成したしおり



日ツアーで外国の方と交流



姉妹校からのしおりのお礼


④ 近隣の子ども園、小学校、特別支援学校等の学校間交流・姉妹校交流

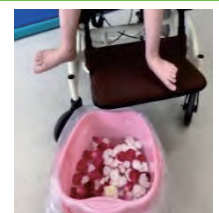
世界バラ会議福山大会の参加者向けに作ったバラをデザインしたしおりを地域協働のためのツールと考え増産し、近隣の子ども園、小学校、特別支援学校に配布した。また児童生徒会からは手紙を添えて、韓国の姉妹校にプレゼントすることができた。姉妹校からはお礼の言葉と楽器演奏をしている動画が送られ、特別活動等の時間で視聴することができた。

⑤ 校外学習・体験学習の内容見直し

これまでの校外学習先の選定基準を見直し、バラを観察できる時期や場所を選定することができた。図書館、福山駅や福山市役所、美術館や歴史博物館、市立大学等の公共施設を中心にバラに関する場所で学習を深めている。また、校内における体験学習として、バラのバスボム作りやまちづくり出前講座等の外部講師を活用する授業を展開した。

⑥ 学習内容の変化・充実

バラの色、香り、種類、花びらは重度重複障害の児童生徒にも分かりやすい題材であり、探究課題として設定しやすいことを教職員に周知したことで、各教科や合わせた指導、自立活動において積極的に扱う学年が徐々に増えてきた。年間指導計画に「」のマークを追記し、教職員が授業づくりの際に意識付けを図っている。



学校に提供されたバラや花びらで足湯をする様子

取組の過程：一人ひとりがインフルエンサー・・・

- 学校運営協議会の委員が大学教授、地域関係者、行政、PTAで構成されていることから、学校の実態を踏まえて地域協働学習を推進するためのアイデアをもらうことができた。
- バラを軸に主体的な学びを展開することが決まった後は、委員たちがインフルエンサーとなってくれたことで話が広がり、関係各所と連携がしやすくなった。
- 教務主任を中心に分掌主任や参画意識のある有志を招集し、「ふくとく つながローズ プロジェクト」を立ち上げ、頻回にプロジェクト会議を開催した。
- しおり代はPTA会費で計上し、印刷会社に依頼することができた。

活動の成果：児童生徒が地域・社会とつながることができた！！

- 高等部生徒によるバラ花壇づくりにより、全校生徒がバラに直接触れ合う機会が増えるだけでなく、各学年で授業の充実化が進み、掲示物や作品が増えて学校が明るくなり来校者に見てもらえることができています。
- 教職員、保護者への取組への理解が徐々に進み、ばらの花を提供してもらうことが増えてきた。これは地域協働の意義や取組の価値が浸透してきたためと考えられ、その他の体験活動として移動図書館や読み聞かせ、パラスポーツ体験等、校内での体験学習の増加・充実にも繋がっている。
- 取組を通して付けさせたい力は何か、どのように学ばせるかというアクティブ・ラーニングの視点で教員が話し合う機会が増え、授業改善を進めることができています。

準大賞	【エントリー名】 海南市立亀川小学校
	【活動名】 変わる先生、学校、そして子ども ～アップデート 主体性×対話×DX改革～
解決すべき課題： <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start; padding: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 40%;"> ○子供の主体性の育成の課題・教師の多忙 ○指導観・学習観・研修観の変換の難しさ </div> <div style="width: 55%;"> 子どもの主体性の育成には、本校では長年取り組んできたが、十分定着していなかった。加え、1クラスの児童数が多く、教員の多忙感から授業改善等に時間を割けないというジレンマに悩む教員が多かった。 </div> </div>	
<p>目標 【研究主題】人とつながりながら主体的に学ぶ子どもの育成 ～情報活用能力を生かし自ら考え深め合う授業をめざして～</p> <p>方針 ① 授業改善・校内研修の充実・先進校視察 ② 校務DXの推進（Teamsの活用） ③ 子どもが選び、子どもが活躍する「子どもが主語」の教育</p> <p>授業改善等の取り組みを進めるためには、業務軽減と教材研究・研修時間の確保が不可欠である。研究授業や校内研修、先進校の視察などを通じて、教員が学ぶ機会を増やすことで、自然と授業が変わり、子どもたちの姿にも変容があると想定する。子どもの力と先生方の力を信じ、双方に委ねる「相似形」の関係を意識しながら、自由度の高い研究と校務DXを推進していく。</p>	
<p>活動内容：</p> <p>① 教師の学び方改革（方針①）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究方針の共有化・カリキュラムマネジメント・情報活用能力育成校内ルーブリック作成。 ・複数名での先進校視察や研究会参加し、校内で報告会の実施。オンライン研修の環境整備。 ・校内研修改革として「授業改善プロジェクト」に着手。 <p>② Teamsを活用した校務軽減（方針②）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジャンル別のチャンネル（「日報」「学年」「研究授業」等）を作成。各担当が情報を発信。閲覧後は、スタンプやコメントでリアクション。学年チャンネルでは、日々の実践や悩みを共有。授業研チャンネルでは、リアルタイムにチャットにコメントや写真をアップし情報共有。 <p>③ 子どもに委ねる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（方針③）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元内自由進度学習、マイプラン学習や5年生の算数科の反転学習などの授業形態の変革。 ・「校内マラソン記録会」を、子どもが種目選択する「ランランフェスティバル」に変更。 ・「運動会」の競技種目を1～6年生の選択制にし、ブロック制でもなく対抗戦でもなく子どもの第1希望を優先。子どもの思いが発揮できる運動会「カメリンピック」に改革。 	
<p>取組の過程：</p> <p>【令和4・5年度】情報活用能力を軸に研究 カリキュラムマネジメント・ルーブリック作成 『そもそも情報活用能力とは何か』</p> <p>一人一台端末の導入により、授業での活用方法について教員が試行錯誤を重ねていた。そこで本校では、情報活用能力育成を新たな研究テーマの軸として設定した。しかし当初はその定義すら曖昧な状態であった。和歌山大学の豊田教授の指導のもと、7月に情報活用能力育成ルーブリックと年間指導計画をなんとか全職員で作成。年度末には、「子どもの実態に合ったルーブリックに改良したい」という声上がり、改訂版を作成。令和5年度4月に全児童にも配布し共有化を図った。12月には、市内教員対象に授業公開。本校の「だれと・どこで・どのように」学ぶか子どもに委ねた学習スタイルは、他校一部教員から「勝手に教室を移動してケガとかあったら。教師としての責任は？」といった批判もあった。また本校でも、児童の理解度の把握が難しいのでは、と本校の学習スタイルの良さを実感できずに戸惑う声があった。情報活用能力育成というフェーズを経て次の授業観変換への困難さが浮き彫りになった。</p>	

【令和6年度】単元内自由進度学習と校務DX ～文部科学省リーディングDX指定校～

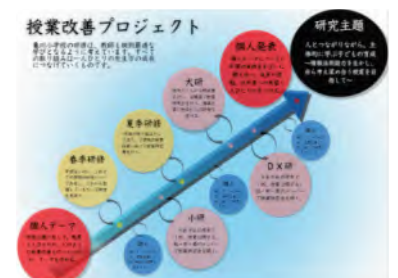
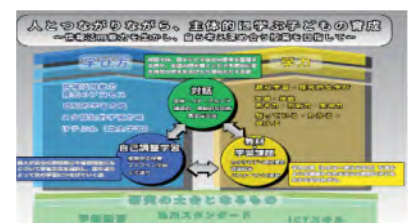
2年間の実践を踏まえ、情報活用能力育成には、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実が不可欠だと実感した何人かが、さらに授業を変えようと単元内自由進度学習等の授業にチャレンジし始める。手探りであったがやれるところから始め、授業を公開する方法で研究を進めた。同時にTeamsを活用した校務軽減を並行して実行した。加賀市立庄小学校と春日井市立出川小学校への先進校視察が本校の研究を加速させた。自分のめあて、学習内容・方法・時間を子ども自身が決め、必要に応じて友達と対話しながら各教科等の見方・考え方を働かせながら学ぶ子どもの姿が見られるようになる。研究協議会は、8月から熊本大学特任教授前田康裕氏の指導のもと、授業改善プロジェクトとして「対話とリフレクションによる授業研究会」へと刷新する。参加者が対話による概念化を通して自分の授業を振り返る授業研究会となる。1月には、1年生と2年生が算数科のマイプラン学習を実践したことで、全学年で単元内自由進度学習の実施となった。校内マラソン記録会を、着順とタイムを競うレースコースと仲間と楽しく走るジョグコースの選択制の「ランランフェスティバル」に変更したのも令和6年度であった。

【令和7年度】「授業改善プロジェクト」3つの柱「対話」「教材・学習課題」「自己調整学習」

『1年通して「授業改善プロジェクト」に取り組みたい』

研究部のメンバーからこのような申し入れがあった。昨年度末の教員アンケートで、「対話」「教材・学習課題」「自己調整学習」の3点が共通の課題として挙げられていた。そこで、令和7年度はこの3つを研究の柱とし、各教員が個別に最適な課題を設定し、協働的に解決していくプロジェクト型校内研修を実施することとなった。この「授業改善プロジェクト」開始にあたり、研究構想図と年間イメージ図を作成し、研究方針の共有化を図った。これを受け、早くも5月にTeams上で「これってマイプラン？」と初チャレンジの投稿があるなど、それぞれで実践した。夏季研修ではグループごとに研究の進捗状況や悩みを交流した。この授業改善プロジェクトの成果は2月の成果報告会で明らかになる予定である。

一方、今年度は運動会の改革に着手した。前例踏襲ではなく、子どもが競技種目を選択できる「子どもが主語」の運動会を目指した。従来の運動会でも十分保護者も子供も楽しめていたため、変更の必要性に疑問の声もあった。しかし、体育部から「子どもに委ね、子どもの思いが発揮できる新しい運動会にしたい」との提案があった。その提案時に、みんなから「めざす理念は理解できる」との反応があった。着実に『観』の変換が起こっていたと確信する。ただ、すぐに「それでやろう」とはならず、全職員が運動会という同じ土俵で「子どもの思いが発揮できる運動会」という理想と「初めてのことへの不安」や「心配」の間で揺れる気持ちを率直に語り合う本音の対話が行われた。この対話こそが、運動会（改称カメリンピック）の成功を導く原動力となった。見栄えや揃えることを重視した従来型の運動会から、体育の授業を基盤に、個々の子どもの思いを大事にする「子どもが主語」の取り組みへと転換することができた。



活動の成果：教師の意識改革（観の変容）により、子どもの思考が表出し、子どもが活躍する場面が増えた。授業では、誰とどこでどのように学ぶか、めあて、方法、時間を自分で考えて学習している姿がよく見られるようになった、子どもが自走して学ぶ姿から、子どもは教員が考えていたよりずっと手前で困っていることもわかった。子どもの姿から、授業デザインに修正を加えるなど教師主導型から子ども中心の授業へ変化したと言える。また、子どもの変容として、

- ① 思考力・判断力・表現力の向上（全国学力・学習状況調査で3教科全国平均を上回る）
- ② 一斉型授業に戻した際、5年生から「先生、マイプラン学習に戻してほしい」との声。
- ③ 全員参加の子ども主体の学校行事の実現（練習が苦手で欠席していた子が参加できた）

この3つを挙げる。また、校務軽減等もさらに新たな方法を模索中であるが、この常に新しいことを模索する職員間の対話力、そして教員の主体的な研究姿勢も大きな成果であると考えている。

【エントリー名】愛媛県松山市立東中学校

優秀賞

【活動名】松山発！ 巻き込み型改革！ ～「ヒガシンカタイム」で始まる「観」の転換～

解決すべき課題

生徒を主語にする学校教育を実現したい！「ヒガシンカタイム」への挑戦を通して、「観」の転換に取り組み、生徒・教職員・研修機関が互いにアップデートし続ける学校を目指す。

生徒：「座っていれば先生が教えてくれる」から「自ら学びを創り出し、学び続ける」へ。

教職員：「生徒に教える」から「生徒の学びを支え、伴走する」へ。

教育行政：「教職員に知識を一方向的に伝達する」から「教職員と伴走し、共に成長していく」へ。

目標：生徒に学びを委ねる「ヒガシンカタイム」への挑戦の過程で、学校を取り巻く人間の「観」を変えていくことにより、誰もが主体的に関わり学び合う学校づくりを目指す。

方針：管理職・同僚・教育行政を巻き込む。1人の100歩ではなく、100人の1歩を目指す。
最小労力・最大出力を実現し、持続可能な仕組みづくりを目指す。

活動内容

ヒガシンカタイムは「生徒に学びを委ねる」ことを軸に据えた新しい学びのかたちである。生徒自身が「何を・誰と・どこで・どのように」学ぶかを自ら選択し、自由な学びに挑戦する40分間とした。Google スプレッドシートに毎時間の目標と振り返りを記録し、全校生徒で共有することにより、学びの質の向上を図る。



🔑 なぜ、ヒガシンカタイムをするのか？

1 生き方の変化

人生100年時代。学びは「学生の間だけ」ではなく、「大人になっても続けていくもの」へと変わっています。
そのために必要なのは、**学び続ける力**です。

2 社会の変化

一人一台端末や生成AIなど、教育の形も大きく変わってきています。社会や技術の変化に対応する・変化を生み出す人材が重宝されます。
そのために必要なのは、**自ら学ぶ力**です。

だからこそ、「座っていれば先生が教えてくれる」学びから進化して、**「生徒が自分で学びをプロデュースしていくこと」**に挑戦します。

全教職員を巻き込む

- ・管理職とヒガシンカタイムの構想を共有し、理解と支援を得た。
- ・職員会で企画書をもとに説明し、目的と方法を明確に伝えた。
- ・Google スプレッドシートを用いて、教職員同士で活動時の良かった点や改善策を共有する。

全校生徒を巻き込む

- ・全校オリエンテーションで「なぜ行うのか」「どんな時間にしたいのか」を熱く伝えた。
- ・Google スプレッドシートで学び方を共有し、互いに学び合う仕組みをつくる。

研修センターを巻き込む

- ・ヒガシンカタイムの意義や、それに係る研究の方向性について共有し、共通理解を図った。
- ・教職員への伝え方やアンケート内容について、一緒に検討した。
- ・職員会やオリエンテーション、ヒガシンカタイムに継続的に参加を得て、助言を受けた。

保護者・地域を巻き込む

- ・ホームページや学校だよりで目的や活動内容を発信し、理解を広げた。
- ・学校づくり推進協議会でPTAや学校評議員に報告した。

取組の過程

生徒はすぐに新しい学び方を受け入れ、楽しみながら活動した。教職員側の意識変革が難しかったが、「実践しながら理解してもらう」というスタイルが功を奏した。

無関心層へのアプローチ

ヒガシンカタイム開始前は、教職員・生徒ともに約2割程度に無関心な様子が見られた。まず生徒には、「学習のピラミッド」を用いて、友達と教え合うことの価値を伝えた。仲間の主体的な姿が刺激となり、自然と周囲にも良い影響が広がっていった。一方で、教職員には、初めから全員のやる気を求めず、「実践しながらアップデートしていく」方式を採用した。回を重ねるごとに関心と理解が深まり、学校全体に前向きな空気が生まれた。無関心層を直接引き込むのではなく、周りに大きな流れをつくり、徐々に巻き込んでいくことに成功した。

教師の「生徒を手放すこと」への不安への対応

生徒が目届かない場所で活動することに対し、生徒指導面での不安と、学習内容の見取りが十分にできないことに不安を感じる教職員もいた。そこで、生徒の活動場所にできるだけ教職員を配置できるよう人員を調整し、本校が愛媛大学に隣接しているという立地を生かして教育実習生の協力を得ることで、見守り体制を強化した。また、学習面での不安に対しては、生徒に「学習のゴール・内容・振り返り」をスプレッドシートに記入させ、活動の様子を可視化することで、教職員が安心して生徒の学びを見守れる仕組みを整えた。

教員の負担感への配慮

新しい取組に対し、「教職員の負担が増えるのでは」という懸念もあった。そこで、活動の流れを示したプリントを配布し、準備や進行の負担を最小限に抑えた。実際、教職員の負担は想定よりも少なく取り組むことができています。全校オリエンテーションにも全教職員が参加し、ヒガシンカタイムの意義を生徒と共に確認する機会を設け、教員のモチベーションを高めた。

協働の広がり

職員会で「一人では難しいので仲間がほしい」と呼びかけたところ、各学年から数名の教職員が自主的に協力を申し出てくれた。その先生方と共に改善を重ねる中で、徐々に「自分事」として考える教職員が増え、学校全体に前向きな風土が広がっていった。

活動の成果

ヒガシンカタイムの実施を通して生まれている「観」の転換。

- ・生徒は「学び方を自分で決める」ことに楽しさを感じている。ヒガシンカタイムの日をカレンダーに書き込んだり、「回数を増やしてほしい」と話したりする生徒も見られた。日常でも自分のペースで学習に取り組み、友達と教え合いながら学ぶ姿が見られるようになった。
- ・教師の意識にも変化が見られた。当初は「生徒の動きを把握できるのか」「学力向上につながるのか」といった不安もあった。しかし、生徒が楽しそうに自ら学び、友達と学び合う姿を目にするうちに、学びの在り方を考え直すきっかけとなった。こうした経験が通常の授業にも波及し、「教える」から「学びを支える」授業づくりを模索する教師が出てきた。

- ・予想を超えた成果として「保護者・地域の観の転換」も生まれた。

学校づくり推進協議会での発表やホームページ等での発信を通して保護者や地域の方々の関心が高まり、「ヒガシンカタイムを見てみたい」「一緒に加わってみたい」という声が多く寄せられた。これを受け、保護者も参加できる『ヒガシンカタイム・スペシャル DAY』を企画するに至った。従来の「子どもの学びを見守る」立場から「ともに学ぶ」立場へと変化が生まれたのである。

ヒガシンカタイムへの挑戦を通して、誰もが主体的に関わり、学び合う学校づくりが今、東中学校で実現しつつある。さらに来年2月にはまつやま教育研修センターフェスタ 2026 でヒガシンカタイムに関する取組発表を行う予定である。松山市内外にもこの流れを波及させたい。



優秀賞

【活動名】 ゼミから繋がり、広がるSTEAM
～全教科でつむぐ学際的探究学習デザイン～

解決すべき課題： 探究学習を支える指導体制の構築

本校では、高校の総合的な探究の時間に、教科連携型の探究学習（STEAM）を少人数ゼミ形式を異学年合同で実施している。生徒は自分が設定したテーマで高校3年間を通して探究を行う。3年間の流れは、1年生でテーマ決め、2年生で調査・実験など研究のメインの部分に取り組み、3年生でまとめと論文執筆をするといった形で実施している。2020年度よりスタートしたこの系統での探究では、**2・3年生の生徒は16個のゼミに分かれて探究**を行う。2・3年生合同で15～16人が1つの教室に集まり、それぞれ個別のテーマで、時には同じゼミの仲間と協同で活動する。16個のゼミは、それぞれ1人ずつ教師が担当としてつき、指導している。教師の主な役目は、ゼミのファシリテーション、カウンセリングと助言である。**国数英理社に加え、家庭科、情報、芸術、体育と、全ての教科の教師がこの探究学習に関わっている**。探究テーマの近い生徒でゼミを構成しながらも、生徒は他のゼミにも柔軟に行き来しながら探究を進めていく。しかし、全教科の教師が生徒の高度な探究学習に、**教科の垣根をこえて連携するのは容易ではない**。初年度より課題であったことは、**教師自身の研究経験に差があることや分野を横断できる仕組みが確立できていないことであった**。2020年度の開始当初、生徒からは「今の自分の講座だとやりたい研究ができない」など不満の声が出ることもあった。教師側も問題意識はあるものの、**各教科の専門性や評価観点、教科特有の考え方の違いがネック**となり、効果的な連携方法を見出せずにいた。

目標・方針： ゼミ共通フレームの構築と教師の連携体制、各専門性の共有

生徒が一人一人のテーマでのびのびと探究するには、教師が自分の専門分野や既有知識に留めず、様々な情報の獲得方法を生徒とともに模索しながら探究をサポートする体制が理想である。そこで本校では、「**生徒1人1人の探究に1人の教師が時間をかけて関わる**」というゼミの特性をベースにしながら、「**生徒がSTEAMを担当する16人のどの教師とも関わり、またSTEAM担当の教師を通じて、他の全教師へアクセスできるネットワークとして機能する**」ことを目指した。

活動内容： STEAMからの拡がりを重視した教師連携体制の構築

○ 探究全体を支える教員の特性を活かした役割分担

担当者会議で協議しながら、生徒の研究実態に合わせたサポート体制を常にバージョンアップさせながら教師で作るネットワークを更新する。各教科の専門の研究指導に加え、教員の特性を活かした体制を組んで**16名の教員で生徒全体をサポート**する。

- 国語2名：文系アプローチでの研究フロー作成、論文指導
- 英語2名：国際的な調査（英文アンケート等）のサポート
- 社会2名：人文系データ、社会・経済学的研究全般サポート
- 数学2名：統計処理指導・サポート
- 理科3名：各種実験指導・サポート
- 情報1名：プログラミング系研究指導・サポート
- 家庭1名：被服、調理関連の実験指導・サポート
- 芸術2名：芸術系研究への資材管理、実験指導・サポート
- 体育1名：体育施設、用具を用いる実験指導・サポート



他の全教師にもアクセス可能



○ 名古屋大学博士課程の学生が助手となり研究に慣れていない教師をサポート

名古屋大学と連携して、さまざまな分野の学生が研究サポートに入り、生徒への助言を行う。研究経験のない教師にとっても探究指導のOJTが可能となっている。

取組の過程：「生徒をリードする」から「生徒をつなぐ」へ

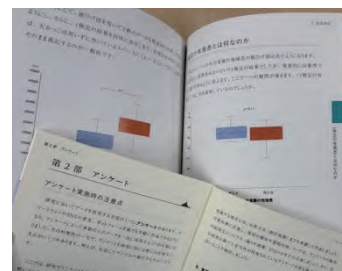
◆ゼミ担当教師を「分野の専門家」から「担任」的な概念へシフト

探究をゼミ形式で研究テーマが専門に近そうな教師を配置したことで、初年度からしばらくは、ゼミ内で教員の専門性が発揮された。教師の裁量にゼミの運営を委ねていたことで、教師が「自分のやりやすい」形にゼミをカスタマイズして各分野での探究を深める環境を構築していた。一方で、各ゼミの枠を越えた探究が難しくなっていた。ゼミの独自性が強くなりすぎてしまい、「このゼミに入らないと自分の探究ができない」と考える生徒が増え、希望しない講座になってしまった生徒は探究意欲が下がり途中で投げ出してしまいうこともあった。また、運営上の不都合だけでなく「学際的な学び」を目標としていたSTEAMの方向性と大きくずれてしまう状況であった。このような状況で、ゼミを横断しながら探究しやすい仕組みの試行錯誤の結果 2024 年度に当時の担当教員たちで大きく舵を切った。それは「ゼミごとの専門性を弱める」という逆説的な方針だった。教師が専門分野でのリードをやめて「繋げる役割に徹する」という方針である。生徒を他の生徒、教師、文献、資料、場所、方法、研究者、大学生、卒業生など、研究に役立ちそうなリソースに繋げるマネジメントを教師が担っていくことを徹底し、教師は無理に内容の指導はしないことを基本とした（勿論、教師自身の専門とマッチしている場合は直接的な助言はする）。これにより、ゼミの生徒の構成が生徒のテーマと完全一致する必要はなくなった。ゼミでの教師の働きかけは「なんでそう考えたの?」「これについて私にもわかるように教えて」「どうして $A=B$ だと $B=C$ と言えるの?」など、どんどん質問をぶつけることを主とした。カウンセリングを通して生徒のリサーチクエッションの解像度を上げ、その結果アクセスしたい人や情報が具体的になるのでそこへ繋げていく。このような担任的な役割をゼミ担当者が担うようになった。



◆ゼミ共通で運用するモジュールの作成

ゼミが窓口となり、生徒の探究に必要な「人や情報へ繋げる」という大きな方針が固まったことで、STEAM 部会での話題は、各ゼミで活用している進行方法や、リソースの共有となり、STEAMに関わる教員が取り組み内容をどんどん「お裾分け」していこうという意識が高まった。各ゼミの進行方法をまとめ、軸となる指導案を4パターン（カウンセリング重視型、抄読会 or 進捗会型、実験日型、他講座からの質問者を想定型）作成し、その日の状況にあわせて教師が選びやすい仕組みを作った。



さらに、1年生で生徒が学んだ探究のワークフローを教師全員が使いこなすために、データサイエンスの授業をオンデマンドで内部共有、学校独自のテキストを作成し生徒が挿絵を担当した。このテキストは、生徒の意見を取り入れながら毎年アップデートを繰り返している。毎回の授業で提出する進捗報告用紙を作成し、生徒の現状の困り事などを拾い上げられるようにした。さらに、フィールド調査、アンケート、実験を行う場合に提出する申請書類を作成し、全講座で共有することでサポート担当教師のサポートが行き届く仕組みを作った。

活動の成果：「1人の生徒の研究を学校というネットワークでサポートする」体制へ変化

本校での、STEAM 探究が始まり 5 年の試行錯誤の末に辿り着いたのは、「教師の専門性は一旦横に置く」ことで、教師が優れている「クラスマネジメント（担任）」の力が最大限に生きる仕組みであった。これにより生徒の学際的な探究は活発になり、どの研究も多様な視点でアプローチができています。教員を対象とした意識調査では、STEAM 探究を 16 ゼミで展開する前と比較して、働く意欲や指導力の向上に関するスコアが一部の教員だけでなく、全般的に高くなった。これは教員全体で探究に関わる仕組みが整ってきたことに同調している。ゼミ内でも教師のファシリテーションで情報交換が活発に行われるようになった。また、STEAM での探究で、多くのコンペティションにも意欲的に応募し受賞する生徒が増えた。生徒の探究に対する温度差も減り、開始当初見られた、探究の時間に受験勉強をしたり他教科の自習をするものがほとんど居なくなった。

【エントリー名】愛媛県立丹原高等学校

優秀賞

【活動名】“やってみたい”が生まれる学校 ～生徒も先生も主役となる探究文化の醸成～

解決すべき課題：今から5年前、当時の丹原高校は、日本の多くの地域同様、少子化の影響から受検者・入学者が減少傾向にあり、学校存続の危機を背景に、学校の魅力化が強く求められていた。その上で、私たちが注目した現状と課題は、①普通科と園芸科学科を併設する学校であったが両学科の交流は十分でなかったこと、②新学習指導要領の実施に伴い「総合的な探究の時間」の改革が急務であったこと、③生徒は日々の学びや生活に「おもしろさ」や「魅力」を見出しにくい状況にあったこと、④教職員も多忙感から自ら学ぶ姿勢や新しいことへの挑戦が難しく、創造的に挑戦できる環境が不足していたことである。

目標・方針：二学科併設校の特色を活かし、両学科の学びや資源を共有することで生徒と教職員が共に成長できる学校づくりを目指した。そのために、①独自性の高い「総合的な探究の時間」の構築、②生徒や教職員の「やってみたい（＝探究）」に光を当て探究文化を醸成、③学校で生まれる各取組を「私たちの取組」として感じられる環境を整え、共有と共感を通じて共創を生む、を活動方針とした。生徒にとって「おもしろい学び」、教職員にとって「やりがいある学校」を実現する。そして両者の探究が日常となる環境づくりに挑戦した。

活動内容：

学校コーディネート機能の基盤づくり（令和3年度）

【背景】新しい視点で現状を見直し、学校全体の状況把握を重視。二学科併設校ならではの実情や、探究の受け止め方を確かめつつ、次年度への方向づけが課題であった。

【取組】積極的なコミュニケーションや参画を通じて現状を把握し、管理職と課題を共有した。さらに、授業やホームルーム活動、課外活動で探究的な学びを試行・公開し、生徒・教員の反応を確認。活動を通じて課題の解像度が高まり、学校コーディネート機能の基盤となった。

t-timeの構築と実践－生徒の探究の場づくりを教員の協働探究として（令和3・4年度）

【背景】学校全体の状況把握の取組を経て、前述した4つの課題が明確化した。一方で、管理職の柔軟な経営観、探究的な学びに関心を示し議論に加わる教員や共有されるべき実践、そして新しいことを「おもしろい」と感じる生徒の存在など、学校魅力化につながる資源も見えてきた。

【取組】課題と資源を基に、総合的な探究の時間「t-time」を構築・実践した。「ヒト・モノ・コトとの新たな出会い」をコンセプトに、異学年・異学科混合の学びとして地域人材と協働する探究型プログラムとした。生徒には探究の場が、教職員には学びを共に創る場が生まれた。

プロジェクト「tanomo」の旗印化－“やってみたい”でつながる学校（令和4・5年度）

【背景】校内には生徒・教職員の注目すべき多様な取組があったが、共有は表面的で「バラバラ感」があった。また、探究は「総合的な探究の時間」に留まり広がりやを欠いていた。そこで、探究資源を共有し、生徒・教職員双方に主体性を促す仕組みづくりの必要性を感じていた。

【取組】「やってみたい」を合言葉に、プロジェクト「tanomo」を学校全体の旗印として掲げた。これにより多様な取組を束ね、活動の可視化と共感を促した。取組を「私たちの取組」として感じられる雰囲気を広げ、参画や協働につながる土壌を整えた。また、「やってみたい（＝探究）」の担い手を生徒だけでなく教職員・地域へ広げ、共に主役となる探究のイメージを広げた。

※令和4年度末に、愛媛県立学校振興計画（令和5年3月策定）が公表され、丹原高校を含む近隣3校の令和9年度末での閉校と、新たに2校を令和8年度に開校することが正式に決定した。これに伴い、令和6年度募集（＝令和7年度入学生）を最後に、生徒募集を停止した。

学校コーディネート機能の制度化－“やってみたい”を支える仕組みづくり（令和5・6年度）

【背景】学校魅力化や探究活動の充実を求める声が教職員の間に広がり、個々の実践を超えて学校全体で「やってみたい（＝探究）」を支える仕組みの必要性が共有されるようになった。また、

地域社会とつながり、生徒や教職員、学校活動をマッチングする役割も求められるようになった。

【取組】令和5年度に「情報・企画課」を新設し、令和6年度には「振興・企画課」へ改編した。これにより、学校コーディネート機能が校務分掌として制度化され、生徒・教職員・地域の「やってみよう」を受け止める窓口が明確化された。制度化によって継続性が担保され、「やってみよう」（＝探究）」を共有・共感・共創へつなげる仕組みが確立した。

TANKO UPDATE PLUS の定着 — 最後まで動き続ける学校への挑戦（令和7年度）

【背景】令和7年度は、3学年がそろそろ最後の年度であり、翌年度以降は生徒・教職員の減少が見込まれている。こうした状況だからこそ、今ある人材や資源を活かし、「今だからできる学び」を創り出す仕組みと、「私たちの学校」を共に描く文化づくりが必要であった。

【取組】「TANKO UPDATE PLUS」を合言葉に、学校全体で“動き続ける学校づくり”を展開した。行事や日常活動を再構築し、生徒・教職員・地域が協働して「今だからできる挑戦」を企画・実践した。生徒が学校運営に主体的に参画する体制を整え、教職員も柔軟に役割を見直し、両者の個人探究・協働探究が新たな学校文化の継承と創出につながるよう図った。

取組の過程：

積極的雑談による「得意」と「困った」の把握

職員室や教室での“積極的雑談”を通じて、教職員と生徒の「得意」と「困った」を把握。個々の声を学校全体の資源として活かし、協働の基盤を築いた。

積極的おせっかいによる教科・分掌の横断

教員同士の実践や企画に積極的に首をつっこみ、教科や分掌を越えた連携を促進。小さな協力の積み重ねから、自然な協働文化を育んだ。

「らしさ」と「わかりやすさ」を重視したブランディング

「やってみよう」をはじめ、「t-time」、「tanomo」、「TANKO UPDATE PLUS」など、誰もが親しみを持って、かつ、マイブランドを意識できる言葉で取組を表現し、参加意識と一体感を高めた。

不完全さを残すデザイン

あえて完成形を示さず“余白”を残すことで生まれる“物足りなさ感”を大切にし、生徒・教職員の「もっとこうしたら…」を引き出し、次の展開を共に創り出す仕組みとした。

内から外へ、外から内への広報設計

発信を通して外部の学校への興味・関心を高める「アウトプロモーション」と、外部の評価や共感の声による校内意欲の向上をねらう「インナープロモーション」を循環させた。

“〇〇だからできる”発想

制約や課題を前向きに捉え、「今だから」「この学校だから」「このメンバーだから」できる挑戦へと転換し、「私」や「私たち」が主役と思える環境を整えた。

活動の成果：

※以下のタイトルの「」内は、実際に生徒たちから伝えられた声です。

①「私たちはチーム『tanomo』です」— ごちゃまぜ探究と協働文化の定着

普通科×園芸科学科、生徒×先生、学校×地域…垣根を越えた探究活動が日常化。互いの「得意」を活かし合う“ごちゃまぜ”の協働文化が新たなプロジェクトを次々と生み出すようになった。

②「先生、私〇〇をやってみようなんですけど…」— 探究推進体制の確立と仕組み化

t-timeにより探究が根付き、プロジェクト「tanomo」から多様な探究が生まれるようになった。学校コーディネート機能の充実により、「やってみよう」を受け止め、形にする体制が整った。

③「私たちの創る学校はおもしろい！」— 生徒の主体的学びと学校参画の拡大

とある教員の「やってみよう」から始まったルールメイキングプロジェクトにより、ルールづくり＝学校づくりの意識が定着。チーム「tanomo」の協働的な学校づくりが魅力化へとつながった。

④「丹高の先生たちって楽しそう」— 教職員の協働探究文化の醸成

教員の「やってみよう」の声が増え、互いに学び合い支え合う文化が醸成された。教員自身が探究者として挑戦する姿が、生徒や地域に新たな刺激を与え、学校全体の活力へとつながった。

優 秀 賞

【活動名】 アウトプットで変わる学び
～タブレットで創る教員と生徒の主体性～

【解決すべき課題】「思考力、判断力、表現力等の育成」「タブレット活用」「教員の主体的研修」

GIGA 端末の活用を進める過程で、学びの“質”に関わる3つの課題が明らかになった。

①**思考力、判断力、表現力等の弱さ**：複数年の各種学力調査で、「知識・技能」に対して「思考・判断・表現」の領域が相対的に低かった。解法の筋道を説明したり、既習知識を別の文脈で活用したりする場面に弱さが見られた。

②**タブレット活用の質的転換**：使用率は高いが、授業内で「考える・まとめる・伝える」など思考・表現を伴う活用は不十分であった。学びを深めるタブレット活用へと転換する必要があった。

③**教員の主体的研修の欠如**：研修は聴く形式が中心で、授業における生徒の主体性向上を目指しているにも関わらず、校内研修は受動的なものであった。また、授業改善への困り感を持つ教員も多かったが、授業改善に直結する試行・共有・対話が不足していた。

3つの課題の共通点は「アウトプット不足」である。教員も生徒も、学んだことを表現し、発信する機会が不足していた。タブレットを“考える・伝える道具”として活用し、学びを表現し合う文化を育てることが必要だと考えた。

【目標】生徒の「思考力、判断力、表現力等」の育成を軸に、タブレットの活用と教員の主体的研修を連動させ、主体的な学びを育てる。最終的に「考えを自分の言葉で伝え、学び合いに参加できる生徒」の育成を目指す。

【方針】教員も生徒もアウトプットし合い、学校全体を「表現し合うコミュニティ」に変革。

①授業改革：授業で知識を活用するアウトプットの設定。

②研修改革：教員が主体的に学ぶ研修を実施。

③文化改革：教育課程全体でアウトプットの場を創出。

3本柱は互いに循環し、教員と生徒が共に学び合う学校文化の創造を目指した。

【活動内容】「アウトプットラーニング」「個人テーマ研修」「表現し合う学校文化」

「授業改革（活用する学び）」「研修改革（教員が学び合う研修）」「文化改革（学校全体でアウトプットする文化）」の3本柱で実施。

①**授業改革：「アウトプットラーニング」の実践（R05. 04～）**

- ・既習事項を活用し、思考力、判断力、表現力を育てる。
- ・月1回全校で実施。生徒の活動時間を8割確保する。
- ・全教員が伴走し、成果物を校内掲示して共有・称賛。

②**研修改革：「個人テーマ研修」（R06. 04～）**

- ・研修の見直しを図り、個人テーマを深める時間設定。
- ・教員自身が主体的に学び、授業改善を共有。
- ・発表を「対話の場」に転換し、互いの挑戦を共有。

③**文化改革：「表現し合う学校文化」の定着（R05. 04～）**

- ・総合的な学習の時間における探究学習の時間確保と、地域を巻き込んだ発表の機会設定。
- ・生徒会のDX化によりGoogle Classroomやフォームを活用し、情報発信の機会を増加。
- ・地域連携を促進し、「黎明祭」等での表現や地域行事での情報発信の増加。
- ・校務DXの推進により、教員と生徒の時間的ゆとりを生み出した。

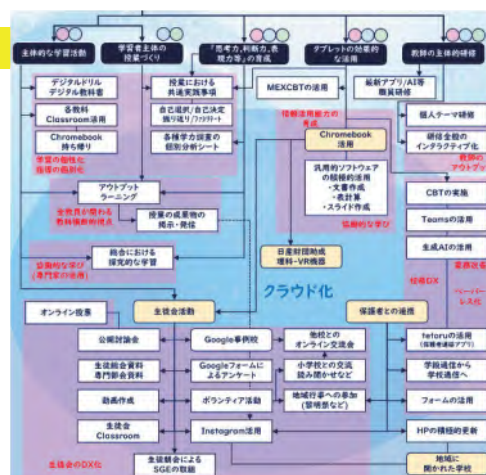


図1 研究の構想図

【取組の過程】習得から活用へ ― 教員と生徒が共に挑戦した3年間の軌跡

I. 習得から活用へ ― 授業転換への挑戦 (R5 年度)

習得から活用への提案に対して、教員の多くから「時間が足りない」「活用で学力が伸びるのか」と不安の声があった。一方で、生徒は「活用したい」「学び合いたい」と前向きな姿を見せていた。そこで、全校で“挑戦の授業”として『アウトプットラーニング』を導入した。最初は、戸惑いながら伴走したが、生徒からは「日頃の学びを活用できた」という達成感に近い声が多く聞かれた。生徒が互いの考えを比べ合い、学び合う姿が見られ、授業の空気が変化していった。

II. タブレット活用の進化 ― 教員も“試行錯誤する学び手”へ (R5 年度～)

端末活用が「調べる・まとめる」で止まっていた時期、FigJam・Padlet・Canva・生成AIなどを導入した。教員も生徒とともに試行錯誤を重ね、少しずつ授業の風景が変わっていった。最初は混乱も多かったが、アウトプットラーニングにおける全教員の授業参加などによって、互いの実践を共有することで、「うまくいかなくても次につなげよう」という前向きな雰囲気が広がった。“試して共有する文化”が生まれ、教員自身が“挑戦する学び手”へと変化した。

III. 教員研修の再設計 ― “語り合う研修”の実現 (R6 年度～)

研修を“聞く”から“語り合う場”へと再構築。業務DXで時間を確保し、個人テーマを設定して自由に挑戦できる仕組みを整えた。中間報告会(10月)・最終報告会(2月)では、Padletを活用し、意見交換できるようにすることで、日々の気づきが自然に共有されるようになった。“失敗授業”も語れるようになり、挑戦することに価値があるという雰囲気が生まれた。「研修が楽しみのになった」「次は自分も挑戦したい」という声が増えていった。

IV. 活用・表現する文化の定着 ― 日常の中にアウトプット (R5 年度～)

授業・行事・地域活動のあらゆる場面にアウトプットが広がった。探究活動では自主的にインタビューや体験を行い、生徒会ではInstagramを活用して保護者や地域に情報発信をしている。生徒会活動では、動画作成などの表現する活動が増加し、生徒会選挙は演説会から討論会へ進化していった。“教える学校”から“学びを活用し発信するコミュニティ”へ。アウトプットが学校の日常に根付き、教員と生徒が共に学びを創る文化として定着した。

【活動の成果】「授業」「研修」「文化」の三位一体による改革が実現

生徒は“活用する学び手”，教員は“試行錯誤する学び手”，学校は“表現し合うコミュニティ”へと変化した。

① “思考・判断・表現”の向上 ― 生徒の変化

学力調査では「知識・技能」に対する「思考・判断・表現」領域が前年より向上した。授業中の意見交流回数やアウトプットの機会が大幅に増え，“聞く授業”から“活用する授業”への転換が進んだ。主体的に課題解決に取り組む生徒は全国平均を大きく上回る。

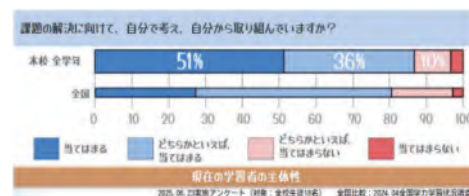


図2 生徒の主体性アンケート

②教員文化の転換 ― 教員の変化

「個人テーマ研修」により、全教員が年間で一つのテーマに取り組んだ。互いのテーマを共有することで、授業改善に関する教員間の交流が活性化した。「生徒に挑戦を促すなら、まず自分たちが挑戦する」という意識が広がり、成功例だけでなく、失敗も共有され研修風土が生まれた。これにより、教員同士が学び合う文化の形成が進んだ。

③ 学校文化の定着とDX推進による改革

校務DX(校務DXチェックリスト790/990点(県平均+407))により、教員の時間的・心理的ゆとりを確保し、生徒会活動や地域行事、探究発表会でICT活用とアウトプット文化が定着した。これらの成果が評価され、Google事例校に認定され、地区研究公開でも高い関心が寄せられた。

本校は令和8年3月の閉校を目前にしながらも、「最後まで学びを止めない学校」を合言葉に挑戦を続けている。この歩みは、GIGAスクール後の「学びの質的転換」を体現する先進的な実践であり、閉校の節目を超えて未来の教育へとバトンをつなぐものである。本取組の成果は、ICTと協働の力で“学びを創る学校”を実現する、他校にも広がる実践モデルである。

【エントリー名】 栗東市立栗東中学校

優 秀 賞

【活動名】 全校・地域でつくりあげる特別活動 ～自分事になる栗中版学級会指導モデルの確立～

解決すべき課題：

研究開始当初、本校は生徒指導上の複雑な課題に直面しており、その根底には、生徒の集団や自己の課題を自ら解決する力、すなわち「話す力」や「意見の折り合いをつける力」が未発達であるという課題があった。これは、生徒の「自主的、実践的な態度」育成を妨げるものであった。

この課題解決のため、校内研究を教科別で実施し、生徒の力の育成をはかったが、以下の構造的な問題により、学校全体の共通課題の解決には至らなかった。

1. 議論の深化の限界： 研究テーマが教科の知識・技能習得に偏りがちとなり、生徒の生活や人間関係に関わる集団活動という学校生活の核となるテーマを深く議論する機会が限定された。

2. 教職員の「自分事」化の欠如： 教科という枠内のテーマは、生徒の成長という共通の喜びや課題に直結しにくく、多くの教員が研究を「自分事」として捉え、生徒の変容を共に追いかける意欲が生まれにくかった。

この状況を打開するため、生徒の資質・能力育成の土台となる特別活動（学級会）に焦点を移すことを決断した。特に、中学校現場での系統的な学級会導入事例が極めて稀な中、全教員が指導でき、生徒全員が参画できる普遍的な指導モデル（栗東中形式）の確立が求められた。

目標・方針：主体的に課題解決しようとする姿勢を全校でつくりあげる

生徒が「話す力」や「意見の折り合いをつける力」を核とした仲間力を育成し、自己決定と協働のプロセスを経験することで、集団や自己の課題を自主的、実践的に解決する資質・能力を身につける。そして、教職員全員で生徒の主体性の変容を共有し、指導観の一致を目指す。

1. 「栗東中形式」の学級会の確立： 生徒全員が主体的に参加できる共通の指導様式を開発し、その定着を図る。

2. 教職員の「自分事」化の促進と生徒の変容の共有： 教職員全員が、生徒の生活上の課題解決を通じた変容を「自分事」として捉え、共にその成長をみる文化を醸成する。

3. 3年間を見通した系統的な指導の構築： 話合いの質の向上に関するアンケートから、2年生時に生徒の主体性や協働性が一時的に低下する傾向が見られたことを踏まえ、中学校3年間を通じて持続的に能力を育成する系統的な指導計画を策定・実施する。

活動内容：

1. 先駆的な「栗東中形式」学級会（R1・2）： 中学校学級会の事例が稀な中、全校で学級会のプロセスや板書様式を統一し、生徒全員が安心して参加できる共通形式を開発・確立した。

2. 能力育成のための指導体系化（R3以降）： 「話す力」と「意見の折り合いをつける力」を確実に育成するため、以下の指導法を開発・導入し、指導を体系化した。また、一つの学級会の指導案を複数作成し、担任が学級の実情に合わせて選択できるようにした。

・ **話合いエクササイズ（基礎力の育成）：** 「出し合う→比べ合う→まとめる」という少人数での基礎的な話合い活動を導入し、すべての生徒の「話す」基礎スキルを系統的に育成する。

・ **司会・書記による予想板書：** 議論の前に、司会や書記の生徒が予想板書を作成する指導、学級会後に実際の板書と予想板書を見比べる活動を取り入れた。これは、生徒が議論の流れを事前に予測・構造化し、「折り合いをつける」力の育成を目指している。

3. 指導の系統性と評価の導入： アンケート結果に基づき、3年間を通じて能力を持続的に育成するための段階的な指導計画を策定した。R6年度からは、生徒による学級会の評価を導入し、結果を掲示物として活用することで、議論の質を客観視し、向上させるサイクルを構築した。R7年度からは、小学校とつながり、小学校6年間とつなぎ合わせて義務教育9年間計画を作っている。

取組の過程：本研究は、R1年度の研究体制の転換から始まり、指導の形式確立（R1/R2）、指導法の体系化と校内連携（R3～）、そして小中連携（R7～）へと展開した。

1. 指導体制の転換と形式の確立（R1・R2）：R1年度に校内研究テーマを特別活動に転換し、教科の特性なく、すべての学級の生徒の話し合い活動を研究対象とした。同時に、全校共通の「栗東中形式」を開発・導入した。この体制転換により、教職員が、生徒の成長を「**自分事**」として捉える文化の基盤が作られた。

2. 指導の体系化と校内連携による指導の根幹化（R3～）：自信がなく、話し合いに参加しにくい生徒も育成できるよう、R3年度以降、「話し合いエクササイズ」等の指導法を導入し、指導の体系化を確立。研究に対する教員間の温度差をなくすため、実践後には、教師間で生徒の変容を具体的に語り合い、指導観の共通理解を深めた。教員が活動を体験する研修会も実施した（右図）。特別活動の指導は道徳部会や生徒指導部会など、校内すべての部会と連携する指導の根幹となり、**全校的な指導体制**が確立した。

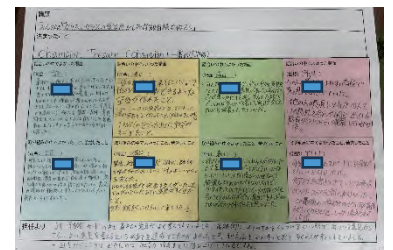


3. 全校活動への波及と系統的な指導の深化（R3～R6）：学級会で定着した話し合いの技術は、生徒会活動における検討会議など、他の特別活動領域へ広範に波及し、全校的な課題解決能力が向上した。また、年度ごとの生徒の変容度合いの差に悩む教員の姿が見られたが、アンケート結果に基づき学年ごとの指導力点を明確にし、**3年間の系統的な指導計画を策定**したことにより、年度ごとでなく、長い目で生徒の変容を見とる意識が醸成した。さらに、R6年度より生徒による学級会の評価を導入し、生徒の主体的な質向上を促した。

4. 義務教育9年間連携への展開（R7～）：年度ごとに入学してくる生徒の話しす力に差が見られたことから、R7年度からは、校区内の小学校と連携を開始し、これまでの中学校3年間の指導計画をさらに拡大し、**小中9年間を通じた系統的な指導モデルの確立**に向けた取り組みを始めている。

活動の成果：本研究は、特別活動の研究への転換により、生徒の資質・能力育成の面で以下の顕著な成果を収め、その指導モデルは校外にまで波及している。

1. 「話しす力」と「議論を構造化する力」の定着：話し合いエクササイズを通じた基礎スキルの育成と、予想板書による議論構造化能力の育成、司会や書記の生徒による話し合いの評価（右図）により、生徒は集団の課題を自力で解決し、多様な意見を調整しながら合意形成を図るプロセスを体得した。その結果、生徒会活動の質の向上や**生徒の主体的、実践的な態度が向上**した。



2. 指導の根幹化と教職員の指導観の変革：特別活動の研究が道徳や生徒指導など校内すべての活動の根幹となったことで、教職員が、生徒の主体的な変容を共有する文化が定着し、全校で生徒の成長を支える指導体制が確立した。また、3年間の指導案をまとめ、学級の状況により選択できる指導の手引きを作成した。これにより、年度末の教員の異動により、他校から指導経験のない教員が来ても、**年度当初から全校体制での学級会の実施ができる**ようになった。

3. 生徒会活動を通じた全校的な課題解決への波及：「栗東中形式」の話し合いを取り入れた生徒会により、**全校的な課題に取り組む生徒の姿**が見られた。例えば、学年間の交流が少ないという課題を解決するために、縦割りの活動を行うことの利点・方法を話し合い、教員との話し合いの場にてプレゼンし、行事のあり方を変えることができた。同様に、教員や学校運営協議会に自分たちの思いを伝える場を要求し、説得し、活動を広げる姿が見られている。

4. 指導モデルの波及と今後の展開：この「栗東中形式」は、中学校における特別活動の先駆的な指導モデルとして、他の学校・地域への実践報告を通じて広く波及している。さらに、R6年度からの生徒による評価や、R7年度からの**小中連携による9年間の指導計画系統化**への挑戦は、これまでばらばらに行われていた小学校と中学校の指導をつなぎ、自校だけでなく、校区内の児童生徒の力を系統的に育成するモデルとして他の地域へ広く発信していきたい。

入 選

【活動名】 合戦の場は「守り」から「攻め」へ ～「つくる」校内研修で学校力を高める～

解決すべき課題：5年前、学力向上推進リーダーとして本校の勤務が始まった。その2年間で、**対話型授業リフレクション効果の普及**や、教職員の**多様性を融合する必要性**を強く感じた。3年前に教務主任となったことで、もっと組織的でクリティカルな対話の場をつくれなかと考え、形骸化していた校内研修の改善に目を付けた。そこでは新規構築（ビルド）ではなく、働き方改革を前提とした、今あるシステムをシンプルに繋ぎ変え（リンク）、**「受ける」から「つくる」校内研修を目指す**ことで学校教育活動全体をブラッシュアップさせられるのではないかと考えた。

目標・方針：**個性を生かした自律的・協働的な校内研修で「学校力」向上を目指す**

- 方針①ビジョン（目指す児童像）に即した、チーム（3指導部）のシンプル化を図る
方針②個々の企画力と運営力を向上させることで、研修の多様化と効果アップを図る
方針③サーバントリーダーシップの実践により、教職員のやりがいアップを図る

活動内容：

①ビジョンに即した、チームのシンプル化

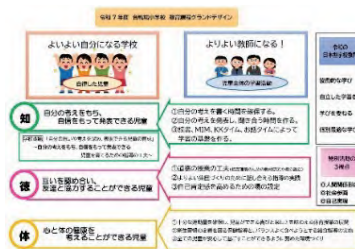
- ・「目指す児童像」を**教育課程グランドデザイン**として見える化し、教育計画と合理的にリンクさせる。
- ・**校務分掌（指導部）を3本柱に再構築**し、個々の役割を明確にする。
- ・3指導部の目標実現に向け、**チームをシンプル化**し機動力を上げる。

②企画運営力の向上、研修の多様化と効果アップ

- ・研修を「必修」と「実践」に分けた年間計画を作成し、**個人の持ち込み企画にも対応できる余白をつくる**ことで「ちょっと攻めてみよう！」という戦意を後押しする。
- ・リンクを意識した授業研究会を行い、**教師個々の得意戦法を生かした提案環境**をつくる。
- ・伝統と斬新それぞれの良さを吟味し、**フレキシブルな研修方法と効果**を模索する。

③個別最適なサーバントリーダーシップの実践

- ・「育成」「協働」「定期確認」「任せる」の4視点を設け、**研修者に応じた個別最適な関わり**をすることで、「一人の10歩」から「十人の1歩」そして「十人の10歩」へ繋げる。
- ・研修の足跡を「カッセンバ Plant」として残し、**効果・成果を見える化**する。
- ・**「やりがい＝居場所×出番×評価」と捉え**、一人一人の意欲を高める。
- ・目指す児童像との関連、研修の種類、企画・運営者の思いを**全体で共有しループ化**する。



取組の過程：

「土台作り」：教務主任1年目



対話の場づくりの第一歩として、新たに「気軽に話せる主任会」を立ち上げた。また、教育計画と校務分掌の整合性を見直し、**原則一人一役の「3指導部会」を再構築**するとともに「目指す児童像」の具現化に向け対話の機会を増やした。しかし、校内研修は学習指導主任主催のものが多く実施回数も少なかった。新企画を提案するにしても、単独で運営するしかなかった。

「ビジョン共有・モデリング」：教務主任2年目



主任会に続き「気軽に話せる部会長会議」を立ち上げ、各部主体で企画・運営する研修を開始。内容は豊富になったがレクチャー型が多い。そこで、対話型や探究型のモデリングを示す。さらに**「子どもの学びと教師の学びは相似形である」という視点に立ち**、若手・中堅と共に試行錯誤を繰り返す。徐々に参加者の意識が高まり、全体のスキルアップを感じるようになってきた。

「攻める」校内研修へ：教務主任 3 年目

「自律的・協働的な」校内研修が発動！



- ◎「特活コミュニケーション」（企画：特別活動主任）
提案者の悩みについて話し合い、解決案を 1 ヶ月間実践し結果を報告。月 1 回自主研修会として実施。特活以外への広がりがみられた。
- ◎「大人のお話タイム」（企画：学習指導主任）
児童の対話力向上のための「朝のお話タイム」を教職員同士でも実践したらコミュカアップ。
- ◎「国語の授業 やって見た！」（企画：2 年目 & 7 年目教員）
放課後の雑談で、国語の授業実践の手応えと難しさを話していたことから生まれた企画。
- ◎「人権教育研修の宿題 助けてくださ〜い」（企画：3 年目教員 & 人権教育担当）
ある課題のシェアが企画・運営に結び付き、多くの参加者で活発な話し合いが行われた。
- ◎「道徳の所見 みんなで一緒に書いてみよう」（企画：道徳教育担当）
- ◎「ビデオリフレクションで授業をみる目を育てよう」（企画：研究授業提供者）

⇒ 研修の種類を整理（レクチャー、ワークショップ、セミナー、ブラッシュアップ）

さらに研修企画・運営のバリエーションの広がりが期待できる。

⇒ 既存の取組と関連した研修（QU アンケートの活用）や、児童の実態に即した研修（不登校対応マニュアル）などに応用も可能になった。

「多様な対話の場」につなげる工夫！

- ◎「ちょこっとお知らせ、研修掲示板」（企画：中堅教員）
授業実践、板書、学級でのできごとなどをアップする掲示板。
- ◎「水 5 授業研究会」

参観した授業の感想を付箋に書き、授業者に届ける。まとまったら「みんなの研修通信」として集約し全体で共有できる。

「カッセンバ Plant」で共有データベース活用！

- ◎全ての校内研修履歴を教育課程グランドデザインと関連づけ保存。



活動の成果：

- ◎目指す児童像と研修との関係を明確にし、部会や担当に委ねたことで、企画を提案する教職員が増え、テーマも多様になった。また相乗効果により研修の充実度も増してきている。

	R5	R6	R7
企画担当者	6 人	8 人	19 人
研修の種類	7 種類	17 種類	24 種類

- ◎研修の企画・運営には、明確な目的と資料・活動内容・展開などを考える必要がある。このマネジメントは「授業づくりと相似形である」ということに気が付出した。それが授業力に反映されるようになり、児童にも友達の多様な考えを聞き再考する力が身に付いてきた。
- ◎研修の目的が「指導力向上の場」や「知識の習得」だけでなく、対話を通して「多様な見方・考え方に気付く場」「同僚性を高める場」へとバージョンアップしている。
- ◎学校力を組織と指導と児童の三位一体と捉えたとき、それらに同時にアプローチできる策としてサーバントリーダーシップを発揮した「つくる」校内研修が効果的であることを提案できた。

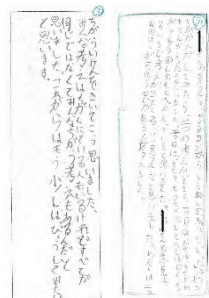
＜教師の自由記述から＞

・「積極的に意見や振り返りを発表し、主体的に参加できた」（2 年目）・「研修会が増えて学べることが多くなり、たくさん刺激を受けています」（7 年目）・「授業提案することで、よりよい授業づくりの一助となるよう努めた」（中堅）・「自分の考え方が変わった。児童を目標に引っ張り過ぎなくてよいことに気付いた」（10 年目）・「自分の考えをしっかりと述べる先生が多く、刺激を受けた。いろいろな見方・考え方を聞くことができ、楽しかった」（ベテラン）

＜3 年児童の振り返り（国語）＞

右：関心をもって友達の考えを聞き再考することで、自分の考えが深まっていることが分かる。

左：考えの多様さに気付くとともに、授業への参加意欲が高まっている。
※授業者は、左の波線を書いた教員。
教員の気付きが授業改善につながり、児童の学びが深まっている。



入 選

【活動名】 学ぶ喜びを感じ挑戦する力を育てる ～じぶん未来ラボ×キャリアデザインステップ～

解決すべき課題：

①生徒の「自分で課題を立てる」機会の不足

令和6年度全国学力・学習状況調査において、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して調べたことを発表する学習活動に取り組んでいる」の割合は、全国 82.2%、兵庫県 72.5%に対し、本校は 65.1%と低水準であった。

②文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」によって可視化された、生徒の内面の『乖離』

独自に実施した文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」のアンケート調査の結果から、生徒 340 名中 237 名が「失敗を恐れず挑戦する力」を身につけたい力と回答した一方で、「学校生活で身につけている」と答えたのは 96 名にとどまり、差は 141 名分と大きかった。

③教員の多様な学力観・価値観の尊重下における、教員間議論の収斂の困難さ

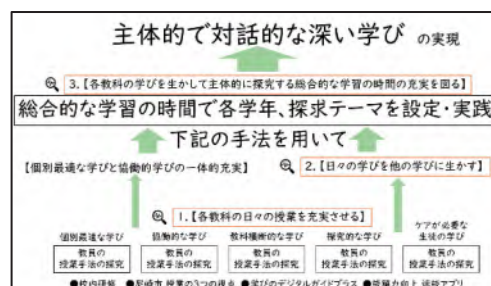
意欲ある教員は比較的多いが、教育観や学力の捉え方が多様であるため、トップダウン・ボトムアップのいずれの方法でテーマを設定してみても、共通理解の形成・浸透に課題があった。

学ぶ喜びを感じ、
挑戦する力を育てる

目標：教員が、自身の仕事を「自分で課題を立てる」探究活動として捉えて挑む

方針：（解決すべき課題の①②③にリンク）

- ①教員それぞれ授業改善を「授業探究」と称し、教員自身が探究手法を自己選択・自己決定し、生徒の活動に繋げる
- ②「挑戦する力」にスポットあてた対話・情報共有の機会を計画的かつ継続的に設ける
- ③教員も生徒も口に出して言える最上位の目標設定を「時間をかけてでも」行う



活動内容：（解決すべき課題の①②③にリンク）

- 1【教員の「授業探究」手法の自己選択、自己決定】 まず教員は日々の授業内容の充実から着手する。次に、日々の学びを他の学びに接続する場面を設計し、授業実践を重ねる。同時に、疎に実践を通じて生徒に多様な探究手法を幅広く定着させることをねらう。①
- 2【探究手法の5つの部会の設立】 個別最適な学び、協働的な学び、教科横断的な学び、探究的な学び、ケアが必要な生徒の学び、の5つの部会を設立する。教員間の対話・情報共有の機会を増設し、本音で話せる機会をつくる。「挑戦する力」に焦点を当て、授業手法のアイデア探索と、各教員の良さを活かした対話の機会を計画的かつ継続的に設ける。②
- 3【小学校と連携して探究活動についての研修会を設定する】 神戸大学から講師を招聘して高次な探究活動について、共通理解を図る。また、先進的な探究活動を行っている校区内小学校と情報共有を行い、互いの活動に生かす。①②
- 4【校内研究授業と尼崎市内の探究部会と接続】 自校から尼崎市内の探究部会に属している教員を介して、研究授業などにおいて意見交換・情報共有を行う。②
- 5【各学年の総合的な学習の時間において高次なテーマでの探究活動の計画と実施】 3年生は「進路選択」における探究『じぶん未来ラボ』、1年生は「自己理解」、2年生は「他者理解」に重点を置くキャリア教育探究『キャリアデザインステップ』を計画・実施する。各教科の学びを生かした主体的な探究を高次なテーマに応用し、総合的な学習の時間の充実を図る。①③
- 6【活動を進めていく上で、議論が噛み合わなくなってしまう時に立ち返って考えるための上位の目標・共通の認識の作成】 向上させたい「学力」とは何か？またその理由について、全教員 25 名にアンケート調査を実施する。内容を整理・分析して、多様な価値観から共通部分

を抽出、上位目標として提案、合意形成を図る。通信を作成し小まめに全体情報発信する。③
7【実践後の成果の検討と確認】 実践後、全国学力・学習状況調査と文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」を事後調査として実施する。アンケート調査だけでは捉えられない部分はインタビュー調査を検討する。①②③

取組の過程：最上位の目標の合意形成が、最初の大きな壁だった。トップダウンなら早い反面、中身が伴いにくい。一方でボトムアップは意見が拡散し収斂しない。そこで「困ること」に焦点を当てた。まず各教員が、想定される負担や不公平、生徒像の違いなど、発生しうる「困ること」をどう回避・緩和できるかを各学年会議のブレインストーミングで出し切り、「誰も困らない」言い回しと運用条件を組み合わせていった。この手順で、想定1ヶ月半かける予定だった提案作成は3ヶ月かかったが、正しさの押しつけ合いを避けつつ、合意形成を図ることができた。

現場の実践を止めないために、授業改善を「授業探究」と位置づけ、同時並行した。教員の自己選択・自己決定で参加できる選択制の部会を立ち上げた。当初は①個別最適な学び②協働的な学び③教科横断的な学び④探究的な学びの4部会だったが、「この構成では興味はない。可視化しやすい認知領域に偏り、不登校・サポートルーム・特別支援の生徒に必要な非認知能力が置き去りになりえる」という、子ども起点のもっともな意見が現場から上がった。これを受け、⑤「ケアが必要な生徒の学び」を新設。包摂の観点を組織設計に織り込み、取りこぼしを減らした。

外部との協働では、ICT活用と校内研究に先進的な校区内の下坂部小学校と情報共有を進める一方、神戸大学と接続して校内研修を実施。前半ディスカッション、後半は講話と質疑応答で、次期学習指導要領の方向を踏まえつつ探究の設計視点を学び、「総合的な学習の時間が各教科の上位で機能する」という見通しを得た。これは本校の「各教科の日々の授業を充実させる」という学力向上方針と一致し、実践への自信につながった。市内ネットワークでも土台を広げた。研究推進委員会とは別の社会科教員が尼崎市内探究部会に参画し、今年度は3年公民の探究的な学びを核に校内研究授業を実施する。これにより、市内の探究動向をいち早く収集し、迅速に発信できる体制が整いつつあり、本校の役割も拡張しつつある。この変化を好転と捉えている。

学年別の実践は、総合的な学習の時間に計画的に位置付けて時間資源を確保した。3年生は卒業生（現役高校生）の5分講話＋質疑による「小田北フォーラム」で進路の自分事化をねらう。続く『じぶん未来ラボ』では、生徒は学び方を個人・協働・教員伴走から自己選択・自己決定する。そして志望理由書や活動記録の早期作成に着手する。希望者は志望校別のグループで、非公開を望む生徒は個人で進められるよう、プライバシー選択も担保した。2年生は探究活動を3段階化。①現場インタビューで仕事のビジョン・やりがい・課題・中学で有用だった学び等を聞き取り、②個人・協働・教員伴走から学び方を選択・自己決定して整理・分析・比較・考察、③「もしこの職業が無くなったら」「この職業のオリンピックがあるなら、競われるスキルは？」など創造的な問いで職業に求められる本質に迫る。1年生は性格・職業適性診断の結果を鵜呑みにせず、「それって本当か？」と問い直すことを主軸に、同学年で相互インタビューを行い、他者視点と自己の実感を統合して自己理解を再記述する。この段階性から『キャリアデザインステップ』と命名した。

活動の成果：・『「困ること」を起点に歩む』多様な価値観を収斂、「相手を困らせない案」で合意を得る仕組み短期的・長期的学力を教員調査で把握し、支障の生まれにくい合意軸で全校の方針を一つに。

・学びの多様化を推進全教員が1つの授業改善を行い、意識改革を行動レベルへ昇華。
・生徒の意識変容の兆し『じぶん未来ラボ』後の調査、文部科学省「義務教育に関する意識に係る調査」では、20項目中6項目が増加。統計的分析にかけ、有意な差が確認できた（多元思考、発表工夫、主体的、思考まとめ、など。※仮のコード化）。また、別アンケートでは「挑戦したいことがある」項目が5段階中3.59から4.06に増加した。これも統計的分析にかけ、有意な差が確認できた。実践の効果の可能性が示された。

・ケアを要する生徒への学びの保障農園での栽培を通して地域と交流し社会性を導く。



NITS大賞 応募一覧

NO.	エントリー名	活動名
1	金沢大学附属特別支援 教諭 吉岡 学	輝ける障害のある生徒になろう 知恵の輪システムで自分を輝かせてみよう
2	垂水市立新城小学校	教師が働きがいを感じる学校づくり 新城で新城の教育の取組
3	広島県立福山特別支援学校 平松紀恵、三堀正貴、池田ひとみ	バラでみんなとつながろう！ 地域リソースを活用した共働的な学びの実践
4	長崎市立稲佐小学校	デジタルサイネージで学校を変える 子どもたちは主体的なデジタルクリエイター
5	株式会社ネオキャリア	学校×企業フレッシュ交流 ななめの関係で子どもと先生が輝く場を
6	学校法人七松学園 認定こども園七松幼稚園	実習生から新任にわたる育成や取組 ニーズに合わせたサポートや魅力発信
7	越谷市立富士中学校	学校図書館は「教育インフラ」だ！ 実践・記録・発信のサイクルによる意識改革
8	沖縄県渡嘉敷村立阿波連小学校	持続可能な地域社会と学校の協働 グローバルな思考で「愛郷」を貫く子の育成
9	那覇市立上間小学校	笑顔の数は日本一を目指す児童会 ～一人一人が活躍できる場づくり～
10	(鹿児島県) 南さつま市立 万世小学校	SWPBS & DXによるいじめ解消 一事業の認知と解消の新たな取組一
11	堀ノ内 佐 (鹿児島県南さつま市立万世小学校 教諭)	誰でもできる外部連携モデル構築 一連携機関からの評価による検証をもとに一
12	栃木県栃木市立合戦場小学校 教諭 越沼 有子	合戦の場は「守り」から「攻め」へ 「つくる」校内研修で学校力を高める
13	相馬市立向陽中学校	福島で生き、福島で学ぶ 中学3年間を通した放射線教育
14	笑顔収集社 (大宮中学校)	中学生が創る笑顔支援の循環社会 ～産学連携の取り組みを通した地域協働～
15	下関市立長府中学校	長府の街は君なしじゃはじまらない 生徒の主体性と郷土愛を育む仕組みづくり
16	茨城県立水海道第一高等学校	海高式探究プログラム 面白い！から学びがはじまる
17	土屋 史子	先生のピンチをつくらない！ 食物アレルギー事故防止と対応の検討
18	大阪府立豊島高等学校 山岡正和	Canva で創るデジタル市民 ～当事者意識を育む探究的・創造的学び～
19	愛媛県松山市立東中学校	松山発！巻き込み型改革！ 「ヒガシカタイム」で始まる「観」の転換
20	愛知県半田市立半田中学校 好田 元希	子どもと教師の Win-Win 改革 ～特別支援教育の好循環を目指して～
21	埼玉県越谷市立大相模中学校	生徒が一步踏み出せる進路指導 ～学年全体での一体感を目指して～
22	学校法人菅藤学園南山形幼稚園	子どもと家庭と地域の思いを紡ぐ ～今、私たちにできることは～
23	熊本県合志市立西合志南中学校 健康教育部	ウェルビーイング向上のための取組 ～自己への挑戦を他への貢献へ活かす～
24	せたな町立北檜山小学校 松村 浩良	学校経営参画意識の向上 学校経営方針の対話と採用、発信を通して
25	羽島市立正木小学校	働きやすさと学びやすさの両立 いじめのない楽しい学校を目指して
26	佐藤 真之	教員の学びを「つなげる」人材育成 人材開発マネージャーが創る学習する組織
27	福岡市立大池小学校 藤山 芳英	目指せ「自律的な学び」！ ～「対話」で育む価値観の形成と転換～
28	広島県呉市立明徳中学校	見通す！やってみる！振り返る！！ ～主体的に学ぶ子ども 伴走する先生～
29	厚木市立飯山小学校	ふるさと飯山を担う子供達の育成 熱意が、そして本気が想いの連鎖を生む
30	与那原町立与那原小学校	目指せ！ワーク・ライフ・バランス 教科担任制と教育課程等の見直しを通して
31	天童市立第一中学校	不登校ゼロを目指した学校づくり 生徒と教師が共に創る学校
32	大分県立由布支援学校	「対話」で拓くウェルビーイング 子どもの学びがいと教職員の働きがいを共創
33	東松山市立東中学校	私たちのアイデアで町づくり！ 東中×活性 EastActivation
34	横浜市立南吉田小学校	子どもに委ねる学校行事への転換 学校行事で伸ばす社会情動的コンピテンシー
35	熊本県八代市立松高小学校	始動！探究型校内研修への挑戦 チームで支える・対話と内省で学びを深める
36	千葉県立特別支援学校市川大野高等学園	生徒が運営する校内コンビニ 事業所・他コースと協働した学習の実践
37	福岡市立和白中学校	ワーキンググループ形式での研修 教師の個別最適な学びと協働的な学びの実現
38	弟子屈町立弟子屈中学校 小林 一博	地域とともに共創する弟子屈探究 「てしかが AMAZING」の可能性
39	出水市立出水中学校	トビ立て！世界へ！出水から！ オーセンティックな国際交流を通して
40	尼崎市立小田北中学校	学ぶ喜びを感じ挑戦する力を育てる じぶん未来ラボ×キャリアデザインステップ
41	札幌市立義務教育学校定山溪学園 主幹教諭 石田正継	教師が創り、教師が育てる教育 DX 現場発、15年にわたる実装と定着の軌跡
42	奄美市立住用小学校 校長 福本淳一	教職員の「えがお」あふれる住用小 採用試験倍率上昇へ！小さな一歩
43	沼津市教育委員会	沼津ベイス쿨・プロジェクト 学校群による持続可能な小規模校教育の創造
44	高崎市立新町第一小学校 萩原 靖久	地域でつくる自走できる学び手 小さな組織による5年間の「総合」再構築
45	舞鶴市立城南中学校 校長 鈴木俊治	圧倒的当事者で未来をつくる ～徹底的な自己開示～
46	長崎県立壱岐高等学校 相川真太郎	島のこどもは島で育てる ～壱岐高校だからできること～
47	岐阜県立池田高等学校	カレーづくりで仲間づくり 失敗を許容し合える安心安全な学校へ
48	沖縄県立美里高等学校 教頭 我如古香奈子	「平和の種」育む3つのキョウソウ 戦後80年、未来へつなげる平和教育
49	読谷村立喜名小学校	教師の強みや関心を生かした校内研 大人も子どもも自立した学習者になるために
50	兵庫県高砂市立荒井小学校 谷口誠歩	ゆとりを生み出す学校改善 職員室から始める！始まる！観変える！
51	栃木県立宇都宮東高等学校・附属中学校 主幹教諭 鈴木啓介	生徒と教職員が共創する学校改革 生徒の多様なニーズに対応した学校づくり
52	福井市安居中学校	働きがいを再構築する学校づくり 子供と教師の Agency を育む地域参画

NO.	エントリー名	活動名
53	広島市立東浄小学校	子どもの安心感を高める学校づくり 参画意識・危機意識を高める組織をめざして
54	奈良県桜井市立織田小学校	子どもたちのための学校づくり 教員業務支援員の仕事と教職員の協働
55	宗像市立赤間西小学校	誰かを楽にする学校の業務カイゼン トヨタ生産方式（TPS）で現場を見つめる
56	南九州市立松山小学校	「松山の魅力発信」プロジェクト 郷土を知り郷土に誇りをもつ児童の育成
57	高槻市立第一中学校	会議の質的向上による学校改善 構造的設計と運営ルールの工夫を通して
58	榛東村立南小学校 野口 賢太郎	欠席者課題作成システムの開発 「10分の児童の為に」が、授業を変える
59	山形市立第五中学校	教育目標を核に成長する学校 ～対話が育む学びとつながりの輪～
60	豊明市立沓掛中学校／一般社団法人ひらけエデュケーション	「子どものため」って何だっけ？ 教育にこそ、インフォームド・コンセントを
61	堺市立錦西小学校 加藤 壮磨 大辻 真実	教員全員で創る錦西アーカイブ 全員の実践の蓄積が、学校の教育知的財産に
62	美濃市立美濃小学校	より Fantastic な学校へ 特別支援教育の視点から学校をアップデート
63	つくば市立竹園東中学校	教師のウェルビーイングの向上 「働きたい」と「働きやすさ」の両立
64	筑後市立筑後中学校	生徒が主役の学校づくりへの挑戦 教師の得意を生かす教育活動への参画
65	九州産業大学付属九州高等学校	対話と自己理解を深める学びの場 Lego®を活用した共創の場づくり
66	諫早市立明峰中学校	グローバル人材育成を目指す 自分の思いを世界に発信できる生徒の育成
67	石川県加賀市立動橋小学校	環境を変えて、文化を動かす ー自律と挑戦を育む6か月のアプローチー
68	出水市立米ノ津中学校	教員支援と連携の学校づくり 多様化・困難化する生徒に応じた指導体制
69	群馬県立尾瀬高等学校	シン・コミュニティ・スクール 躍動感ある学校運営協議会が地域を変える
70	名古屋大学教育学部附属中・高等学校	ゼミから繋がり、広がる STEAM 全教科でつむぐ学際的探究学習デザイン
71	群馬県総合教育センター子ども教育相談係	不登校児童生徒の心の拠り所の充実 「つなサポ」の創設と保護者支援を通して
72	沼津市立長井崎小中一貫学校	少子化のピンチを成長のチャンスに 学校課題の解決で社会的資質を育む実践
73	芦屋市教育委員会	「主体性の回復」に向けて 完全自主参加型の研究推進チームの組織
74	川端 康登	地域を支える総合学習 公民館を核にした児童主体の探究学習
75	鹿児島県霧島市立国分南中学校 教務主任 大重嘉孝	南中5Cで創る魅力ある学校！ 生徒の無限の可能性を最大限に伸ばす教育
76	伊万里市立青嶺中学校	小中で「対話」を極める人権教育 違いを尊重する「聴く」力の育成を目指して
77	さつま町立柏原小学校	Win×3！担任の新しいカタチ ～柏原小版インクルーシブ教育の夜明け～
78	愛媛県立丹原高等学校	“やってみよう”が生まれる学校 生徒も先生も主役となる探究文化の醸成
79	千葉県富津市立吉野小学校	みんなが輝く あったかよしの ～楽しく幸せに働ける学校づくり～
80	海安市立亀川小学校	変わる先生、学校、そして子ども ～アップデート 主体性×対話×DX改革～
81	福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校9年部（中学3年）	特産品プロモーションプロジェクト ～自由ヶ丘のおいしいをより多くの人々へ～
82	茨城県石岡市立林小学校	コーチングで飛躍する児童と教師！ データで導く、先生と児童の共育探究モデル
83	柏市幼児教育共同実践研究推進委員会	こはでつなぐ幼児教育・保育の輪 子どもの声に耳を傾け共に育ち合う柏の実践
84	高崎市立第一中学校	「生徒主体」の学校づくりの追究 異学年交流やICTを活用した取組を通して
85	和水町立三加和小学校 校長 福山 尚美	「チーム三加和」学校マネジメント 大好きな三加和小学校をもっと素敵な学校へ
86	熊本市立芳野中学校 フレンドリーオンライン	オンラインによる不登校生支援 ドキドキワクワクいろんな人と楽しく学ぶ
87	奈良市立一条高等学校・一条高等学校附属中学校 探究部	出会い・語り・拓くで「私」を探究 ～先生も生徒も自分ごととして捉える学校～
88	広島市立砂谷中学校	「家庭学習0時間」を0人に 全校で振り返りと目標設定をする仕組づくり
89	鹿児島県 いちき串木野市立 羽島中学校	アウトプットで変わる学び タブレットで創る教員と生徒の主体性
90	新渡戸文化小学校	共に“学び”“対話”する教育研究 教員のやりがいと再構築する新渡戸の挑戦
91	福岡女子商業高等学校	生徒の挑戦マインドに火がつく学校 ～「余白」が「挑戦」を生む学校改革～
92	高松市総合教育センター	探究する教師、大好き高松 初任者が実感する、探究的な学びの追体験
93	関市立津保川中学校 土屋 寿美	持続可能な学校教育プロジェクト 学校と地域が協働する教育活動
94	熊本県天草市立御所浦中学校	探究的に学ぶ総合的な学習の時間 ～ふるさと探究から MY 探究への展開～
95	沖縄県那覇市立安謝小学校	伝統文化教育と働き方改革の両立 本質を捉えた中間教材の開発と活用を通して
96	尼崎市立上坂部小学校（ともえカフェ店長）	「あの子」の育ちを願う授業と学校 上小の子どもは上小の先生みんなで育てる
97	鹿児島大学教育学部附属特別支援学校小学部	子どもの主体的な姿を育む自立活動 「よりよい自分」の下でチームアプローチ！
98	青森県立弘前第一養護学校	未来を創る児童生徒の育成 「私たちとSDGs」がつなぐ未来
99	栗東市立栗東中学校	全校・地域でつくりあげる特別活動 自分事になる栗中版学級会指導モデルの確立
100	岡山県立玉島高等学校	教科が主役でつくるSTEAM教育 ～各教科を繋ぐ教師も生徒も教科横断探究～
101	神戸大学附属小学校	授業で勝負できる教師に 研究活動の組織的なバックアップを通して
102	東根市立第一中学校	地域自由探究で育つ「問い」と根拠 生徒の探究を一元管理☆自作汎用アプリ活用
103	大阪市立今里小学校 教頭 斉田俊平	消えゆく我が国の伝統野菜を守る！ 「なにわ」と「島」が紡ぐ食文化交流

応募校の声

全国から
103点の応募が
ありました

今回の応募を機にたくさん勉強させていただきました。この取り組みが少しでも子どもたちに還元できればと思っています。

学校現場のモチベーションアップにつながればと思います。

応募内容が簡単で取り組みやすかった。今回のエントリーをきっかけに今後も挑戦したいです。

学校内での取り組みがどうしても閉鎖的な形で終始しやすいので良い機会と捉えて応募しました。こういった活動で全国の学校が実践を交流する場になるのは本校のみならず学校教育全体のレベルアップや交流につながるの魅力的な取り組みと思い参加しました。

日本で培われてきた教育文化を継続しながらも、10年後・20年後の日本教育を見据えた取組を共有できる場になってほしいと願う。

NITS大賞の取組が、現職の先生方、これから教師を志す方々に伝わり、元気な学校現場の実現につながることを期待しています。

多くの職員の方に周知され、現場に生かされることを期待しております。

毎年の受賞校の取組が大変参考になり、学校経営ビジョンを描く際の参考にしています。

自校の取り組みに対して、生徒・保護者・地域以外からフィードバックを受けられる機会ととらえました。本校職員が自信をもって更に意欲的に活動できるきっかけにしたいと思います。

来年度以降も本事業を通して、自己研鑽を深めていきたい。

このNITSの取り組みで他の都道府県の取り組みを知り、全く違う実態の中で行われている実践の工夫や、全く違う環境であるのに同じ悩みを持って考えているのだということが伝わりました。

編集後記

教育の現場では、日々の実践の中で多くの工夫や挑戦が生まれています。本事例集には、そうした営みの中から生まれた多様な取組が、全国各地から寄せられました。子どもたちの学びをより豊かなものにしようと、現場で試行錯誤を重ねながら取り組まれてきた実践の一つ一つに、教育への思いや創意が息づいています。教育の営みは、人と人との関わりの中で語られ、共有されながら広がっていきます。ここに掲載された取組が、読者の皆さまに新たな視点や発想をもたらし、それぞれの現場での実践を見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

「語り、描き、紡ぐ未来」

教育の実践は、経験を語り合いながらこれからの姿を思い描き、その歩みをつないでいく中で形づくられていきます。本事例集が、教育現場に新たな対話や学び合いを生み出し、次なる挑戦へとつながる契機となることを願っています。

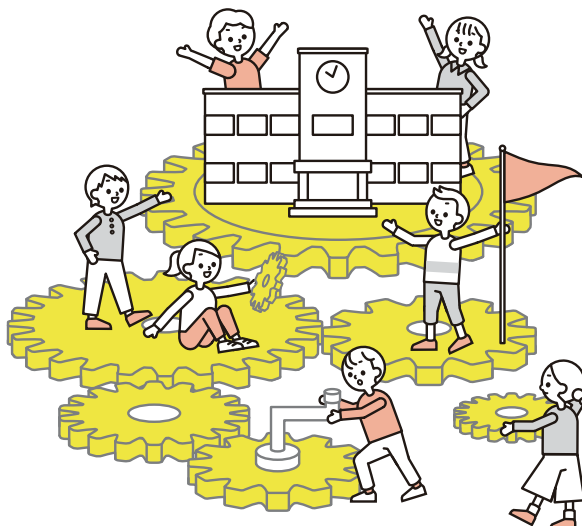
最後に、本事例集の制作にご協力いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。

独立行政法人教職員支援機構 NITS大賞担当一同



第10回NITS大賞 大募集

「NITS大賞は、独立行政法人教職員支援機構（NITS・ニッツ）が、学校をとりまく課題の解決に向けて実践したチーム学校の取組を広く募集し、表彰・公開することにより、教育の現場に優れた取組を普及していく事業です。



子供を主語に、
学校が動き出す

応募期間

令和8年9月1日(火)～11月6日(金) 必着

主 題 子供一人一人が輝ける場となるように～教師の働きがいを再構築する学校づくり～

エントリー要件 学習指導要領の着実な実施、学校における業務改善への取組、特色ある学校づくりなど、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現に向けて、多様な人々との協働を含め、のびのびと楽しく誇りを持って学校改善に取り組んだ実践活動を実施していること。
また、その実践が教職員等の学びや成長につながり、学校全体の教育力向上に寄与していること。
(令和8年度または同年度を含む期間に取り組んだ実践活動)

エントリー資格 「エントリー要件」に示す実践活動に主体的に参画した個人または団体
(教職員、児童生徒、保護者、地域の方(学校運営協議会を含む)、及びその関係団体)
※個人がエントリーする場合、または学校以外の団体等がエントリーする場合は、必ず当該学校長の許可を得てください。

審査方法 一次審査: エントリーシートをもとに書類審査
二次審査: プレゼンテーション審査

表彰 大賞(表彰状、賞金30万円を授与)、準大賞(表彰状、賞金10万円を授与)、
優秀賞(表彰状、賞金5万円を授与)、入選(表彰状、賞金2万円を授与)等を選出

提出方法 [エントリーシート(A3用紙片面1枚)と連絡先シート(A4用紙片面1枚)を提出期限内に送信してください。
送信先アドレス: award@ml.nits.go.jp]

エントリーの宛先、
お問い合わせ先

独立行政法人教職員支援機構 研修推進課
〒305-0802 茨城県つくば市立原3番地
Mail: award@ml.nits.go.jp Tel: 029-879-7004



第10回NITS大賞
募集要項



第9回NITS大賞
事例集



第9回NITS大賞
受賞者一覧、活動発表動画